

奈良時代の一切経について——勘経の意義をめぐって——

宮 崎 健 司

はじめに

日本への仏典の将来は、欽明朝の仏教公伝に際し仏像とともに経論若干が伝来したとする記事⁽¹⁾がはじめて、仏教の伝来に際して仏典の将来が不可欠であったことを示している。また仏典を集成した一大叢書は一切経(大藏経)についても、仏教公伝より百年ほどのちの白雉二年(六五一)十二月に摂津味経宮で読誦されたことが知られる。⁽²⁾一切経の書写の初見は天武天皇二年(六七三)三月の川原寺でのものであり、現存古写経では、個別写経として丙戌年(六八六)銘の教化僧宝林による川内国志貴郡の知識経『金剛場陀羅尼経』⁽³⁾が、一切経としては天平六年(七三四)の願文をもつ聖武天皇発願一切経⁽⁴⁾がそれぞれ最古の例として知られる。

写経という行為は、仏典を書写する行為あるいは書写した仏典そのものを意味するが、その内容は仏教教義やその信仰の問題と密接に関連していると思われる。したがって、写経の分析は、日本仏教の特質の一端を明らかにする重要な問題と考えることができる。

写経の具体相は、書写の内容・主体・目的によって分類することができよう。まず内容としての「一切経」と「個別写経」に分類でき、前者は当該期における仏教理解の状況を、後者は具体的信仰の動向をうかがう材料といえる。次に書写の主体としては「國家的写経」と「民間写経」に分類でき、前者は国家仏教の展開状況つまり政治史的・思想史的意義を、後者は仏教思想の受容実態つまり思想史的意義の材料となるであろう。さらに目的としては、テキストの弘通を目的とした「読誦経」、

表 1 七～八世紀の一切経

No.	名 称	構 成	卷 数	発願者	目 的	写経機構
1	味経宮転読一切経	不明	二一〇〇巻か	天智か		不明
2	川原寺一切経	不明	不明	天武か		川原寺
3	知法発願一切経	一切経論律	不明	沙門知法		不明
4	元正天皇請坐大安寺一切経	不明	一五九七巻	元正か		不明
5	西宅一切経	大小乗経律論+章疏	不明	不明		不明
6	光明子発願一切経	大小乗経律論賢聖集伝+別生・偽疑・録外+章疏	約七〇〇〇巻	光明子	二親(藤原不比等・ 県犬養橘三千代)追 善ほか	皇后宮職系
7	聖武天皇発願一切経	大小乗経律論賢聖集伝+章疏	不明	聖武		内裏系
8	藤原豊成一切経	大小乗経律論+章疏	二四三五巻+α	藤原豊成		藤原豊成家
9	藤原夫人発願一切経	大小乗経律論賢聖集伝+章疏	不明	藤原夫人 (房前女)	亡父母(房前・牟婁 女王)の追善	元興寺か
10	光明子発願一切経	不明	不明	光明子		不明
11	大官一切経	大小乗経律論+別生・疑偽・録 外	約三八五〇〇四〇〇〇 巻未満	聖武		皇后宮職系
12	大井寺一切経	不明	不明	不明		不明
13	観世音一切経	不明	不明	不明		不明
14	武蔵国一切経	不明	不明	不明		武蔵国か
15	後写一切経	大小乗経律+別生・疑偽・録外	合三四六一巻うち重写 三〇巻(11/88)	不明		皇后宮職系
16	六人部東人知識一切経	不明	不明	六人部東人		不明

29	西大寺(十一面堂)一切経	大小乗経律論+偽疑・録外+疏	四三八三卷	称徳		不明
28	西大寺(薬師堂)一切経	大小乗経律論+録外+疏	二九四二卷	称徳		不明
27	今更一部一切経	大小乗経律論+別生・偽疑・録外	四六〇九卷	不明		皇后宮職系・内裏系
27	更一部一切経	大小乗経律論+別生・偽疑・録外	四六〇九卷	不明		皇后宮職系・内裏系
27	始一部一切経	大小乗経律論+別生・偽疑・録外	四六〇九卷×二部	不明		皇后宮職系・内裏系
27	先一部一切経	大小乗経律論+別生・偽疑・録外	四五八五卷	不明		皇后宮職系・内裏系
27	五部一切経	大小乗経律論+別生・偽疑・録外	一部約四六〇〇巻前後	不明		皇后宮職系・内裏系
26	甲部一切経	大小乗経律論+別生・偽疑・録外	約四六四〇巻	不明		皇后宮職系・内裏系か
25	西大寺(弥勒堂)一切経	大小乗経律論+疏	四六一三卷	称徳		不明
24	行信発願一切経	大小乗経律論	二七〇〇巻	僧行信	国家と四恩	不明
23	吉備由利発願一切経	大小乗経律論賢聖集伝+録外+章疏	合五二八二巻	吉備由利		不明
22	光覚知識経	不明	不明	僧光覚	不明	不明
21	周忌斎一切経	大小乗経律論賢聖集伝+別生・疑偽・録外	合五三三〇巻	孝謙	光明子一周忌	皇后宮職系
20	光明皇太后発願一切経	大小乗経律	予定三四三三巻	光明子		皇后宮職系
19	賢聖発願一切経	不明	四二〇〇余巻	僧賢聖		不明
18	孝謙天皇発願一切経・偽・録外+章疏	大乘経律論賢聖集伝+別生・疑	約六五〇〇巻以上	孝謙		内裏系
17	善光朱印経	大小乗経律論?	不明	善光尼か		内裏系か

寺社などへの奉納を目的とした「供養経（奉納経）」、書写行為の功德を期待する「功德経（願経）」に分かれる。書写行為に功德があることは、『大方等如来藏经』『法華経』など多く仏典に説かれるところである。⁽⁶⁾

本稿では、日本古代、とくに奈良時代における一切経書写の様相を概観し、その特質と意義について、勘経という問題に注目して考えてみることにしたい。

一、一切経とその特質

1、奈良時代の一切経

蘭田香融氏によつて、早く一切経については、その内容をシステムとコレクションに分けて考えるべきことが示されたが、そこでは七世紀半ばの日本ではシステムとしての一切経は知られていたが、現実にはコレクションとしては具備していなかったことが指摘されている。⁽⁷⁾ また、岡氏は、奈良時代、ことに正倉院文書を中心として、一切経だけではなく、時々的重要で個別に書写された開写経の分析も重要であり、それによつて当時の仏敎界をリードした皇室仏敎―内裏の仏堂を中心とした仏敎―の、その時々々の傾向をうかがい知ることができるともいわれ

ている。

奈良時代の一切経については、近年の正倉院文書研究の進展⁽⁸⁾によつてさまざまに議論されるようになり、榮原永速男氏や山下有美氏の研究⁽⁹⁾がそれらを総括するものとしてあげられる。さらに古代から中世にかけて一切経を基軸に仏敎史を展望された上川通夫氏の研究⁽¹⁰⁾も重要な指摘を多く含んでいる。以下、先行研究の成果を参考にして、奈良時代の一切経を概観していくことにする。

一切経の伝来は先に指摘したように、白雉二年の謄誦を初見とし、書写としては天武二年の川原寺でのものをはじめとするが、六六〇年頃には入唐僧道昭が多くの経論を将来し、⁽¹¹⁾養老二⁽¹²⁾年（七一八）の入唐僧道慈の帰朝に際しても仏典の将来が推定される。⁽¹³⁾ さらに天平七年（七三五）には入唐僧玄昉が最新の経録である『開元釈教録』とそれに基づく「経論五千余卷」⁽¹⁴⁾を将来し、天平勝宝六年（七五四）唐僧鑑真的来朝や彼を伴った遣唐使によつても仏典がもたらされている。

このような絶え間ない仏典の将来や最新の中国の仏敎事情が輸入されるなか、奈良時代、とくに天平期には律令国家によつて数多くの一切経が書写されていくことになり、表1に示すごとく、当該期には二十歳をはるかに越える一切経書写の盛況ぶりをみることが出来る。

律令国家による一切経の書写は、主に国家的写経機構によって担われていくことになるが、その機構は、皇后宮職系写経機構と内裏系写経機構に大別することができる。

皇后宮職系写経機構は、天平八年（七三六）以前に光明子の皇后宮職管下の写経機構において写経が行われたのが、変遷を遂げながら国家的写経機構として整備され、天平二十年頃には、東大寺の造営官司である造東大寺司管下の写経所として重要な役割を果たすことになった。奈良時代の古文書として著名な正倉院文書は、主にこの造東大寺司写経所に伝来した帳簿群である。一方、奈良時代の写経では皇后宮職系写経機構のみが注目されるくらいがあるが、もう一つの重要な写経機構に内裏系写経機構がある。内裏系写経機構の存在は、上述した一切経の現存最古の書写例である聖武天皇発願一切経の天平六年（七三四）の願文にみえる「写経司」によって指摘され、そのうち皇后宮職系写経機構の写経事業と関連しながら、奈良時代後半の写経事業で重きをなしていった。また、現存古写経や史料によってこれら国家的写経機構とは別にもさまざまな写経機構が存在し、寺院や個人また地方での書写もみいだせる。

さて、一切経の書写は、皇后宮職系写経機構では、光明子発願一切経⁽¹⁶⁾（五月一日経）・大官一切経（先写一切経⁽¹⁷⁾・後写一切経⁽¹⁸⁾・周忌斎一切経などがあげられ、内裏系写経機構では、現存

最古の聖武天皇発願一切経・孝謙天皇発願一切経⁽¹⁹⁾（景雲一切経）などがあげられる。また両機構にまたがるものもあり、甲部一切経・五部一切経⁽²⁰⁾があげられる。その他の写経所でも藤原豊成家での藤原豊成一切経（のち図書寮一切経⁽²¹⁾）や藤原北家での元興寺北宅一切経（藤原夫人願経⁽²²⁾）、善光寺印経⁽²³⁾・吉備由利発願一切経⁽²⁴⁾などがあげられる。

以下、当該期の一切経の特質をみるため、代表的な国家的一切経の書写例として、光明子発願一切経と孝謙天皇発願一切経にしばって、内容とその特質をみていこう。

2、光明子発願一切経と孝謙天皇発願一切経

奈良時代の一切経の書写として、もともと代表的なものは、光明子発願一切経のうちのひとつで、天平十二年（四二〇）五月一日付けの願文をもつことから「五月一日経」と称されるものである⁽²⁵⁾。以下、「五月一日経」と略称する。

五月一日経は、書写の総数が約七〇〇〇巻にも及んだと考えられ、聖護蔵に現存する約七五〇巻に巻間にあるものをあわせて一〇〇〇巻ほどが伝存している。その書写の経緯は、正倉院文書によって詳細に追うことができるが、おおむね以下のものであった。

皇后宮職管下の写経所で天平五年頃にはすでに開始されてお

り、ある一切経を書写する方針であったが、天平七年に唐へ留学していた玄昉が帰朝し、唐・開元十八年（七三〇）に成立したばかりの最新の経録である『開元釈教録』とそれに基づく仏典が将来されたことにより、大きく書写の方針を変更することになる。天平八年九月からは『開元釈教録』入藏録（五〇四八卷）に基づく一切経の書写に変更され、玄昉将来の仏典が借用され、底本とされていた。しかし、実際には玄昉はすべての入藏録の仏典を将来したわけではなかったようで、底本がすべて揃わず事業が停滞する。天平十五年五月からは『開元釈教録』の入藏録以外の別生経・疑偽経、さらには目録自身にも掲載されていない目録外経や中国や朝鮮半島で作成された章疏類をも含めて書写することになったようで、おそらく当時、日本に所在するあらゆる仏典を書写するよう、第二の変更がなされた。その後、書写事業は天平勝宝八歳（七五六）五月に聖武天皇没したことによって終了したと考えられる。この間、天平勝宝四年（七五二）四月の東大寺盧舎那大仏開眼会で講説、転読に使用され東大寺に施入されたほか、後述するように天平勝宝五年～七歳にかけて他本との対校である勘経が行われている。五月一日経は、こののちの一切経のモデルとされ、さらに書写の底本としても重要視されていくことになった。

五月一日経とならんで、奈良時代は一切経書写の事例として

代表的なものが、孝謙天皇発願一切経で、神護景雲二（七六八）年五月十三日付けの願文をもつことから、「景雲一切経」と称されているものである。²⁶以下、「景雲一切経」と略称する。景雲一切経も、書写総数六五〇〇巻以上にのぼるものと考えられ、聖護蔵の約七四〇巻と巻間にあるものとあわせて八〇〇巻弱が伝存している。その書写の経緯も五月一日経と同じく、正倉院文書によって追えるが、以下のようであった。

内裏系写経機構である写御書所で書写がおこわれたが、天平宝字二年（七五八）には書写事業が始まっていたと思われる。天平宝字六年六月ごろには孝謙天皇の側近を中心として勘経が行われ、天平神護元年（七六五）三月から五月ごろにかけてその事業は御執経所に引き継がれていた。そのうち御執経所は奉写一切経司に発展したが、勘経が神護景雲三年七月ごろには終了し、景雲一切経の事業がすべて終了している。その内容は、五月一日経と同様で、『開元釈教録』入藏録を基準としながら、別生経・疑偽経や目録外経、また疏などを含むものであった。勘経に際しては、五月一日経をはじめ、水主内親王経・審祥師書・内堂経・圖書寮経などのテキストが対校本とされたが、こ

とに五月一日経が重要視されていたと考えられる。
山下有美氏は、これら光明子発願の五月一日経と孝謙天皇発願の景雲一切経は奈良時代を代表する国家的写経であり、律令

国家によって認定された一切経として「勅定一切経」と称されている。⁽²⁷⁾

この二つの勅定一切経で共通するのは以下の三点である。

①国家的写経機構（皇后宮職系写経機構と内裏系写経機構）での書写

②勅定一切経として、のちの一切経の基準兼テキストとして重要視

③その構成の特殊性（『開元釈教録』入蔵録を基本としながら、別生経・疑偽経、目錄外経、章疏も含む）

このうち極めて重要であると思われるのは一切経の構成の特殊性である。それは一切経の受容、仏教理解に関わる問題といえるからである。

まず『開元釈教録』入蔵録を基準とすることの意味についてである。『開元釈教録』は西崇福寺の経蔵整備を目指して唐・開元十八年（七三〇）に智昇によって撰述されたもので、私撰ながら成立後に流布・普及して事実上勅撰に準ずる存在として大きな影響を与えた。その『開元釈教録』成立の五年後の天平七年に玄昉によって伝来されたのであり、中国における最新経録として重視されたと考えられる。これは中国の最新の仏教事情が日本へも大きな影響を与えているといえよう。

次いで、入蔵録以外の別生経・疑偽経、また目錄に掲載され

ない目錄外経や章疏を含むことについてである。別生経・疑偽経や目錄外経が含まれていたことには、当時の日本の仏典理解の実状との関わりが考えられる。

山下有美氏は『一切経目錄卷下』（続々修14ノ6・6裏二五ノ三〇）⁽²⁸⁾に注目されている。氏によれば、『開元釈教録』卷二〇末尾の不入蔵目錄と称すべき部分に該当する仏典について、『開元釈教録』ではさまざまな理由によって入蔵しなかったが、当時の日本では、真偽判定が不可能で、遺漏した場合を危惧して取りあえず入蔵しておくという状況であったとし、偽疑経に対する嫌悪感が薄く、受容側の限界によるとされている。さらに章疏をふくむ点についてである。日本では一切経を「経律論疏集伝」と呼称するように章疏類も一括として考えられている節がある。仏典研究の未熟な当時の日本においては、経律論の講説に章疏が必要、不可欠であり、論と章疏の差異の認識が少なかったのではないだろうか。東大寺人仏造立の思想的基盤となったと考えられる天平十二年（七四〇）からの『華嚴経』講説についてみると、その経疏である法蔵述『華嚴経探玄記』（六十華嚴）や惠苑述『統華嚴略疏判定記』（八十華嚴の）への依存が顕著であり、『華嚴経』の成立にかかわる関連仏典でさえ、かなり遅れて注目されていることがわかる。⁽²⁹⁾

また仏典の注記に際して、『開元釈教録』のみではなく、以

前の経録にも依拠していた。例えば、『可請本経目錄』（続々修 14ノ4 十二ノ二一〇）によれば、旧録への関心もうかがわれる。これらは既に受容された仏典とそれに基づく教学が厳然と存在している以上、その扱いをどうするのかという問題があったのではないかと思われる。日本への仏教公伝は百済からであり、当初、朝鮮半島からの影響は多大なものがあつたと推定されるが、仏典に関しても、唐からの将来仏典以外に、多くの朝鮮半島からの将来仏典が存在していたと推定される⁽³¹⁾。『草字釈文』（続別48）の存在は、朝鮮半島からの、草書された翻載経が多く存在していたことを想像させる⁽³²⁾。このような状況下では、『開元釈教録』のみでの仏典集成は、当時の日本仏教の教学を包括することが不可能ではなかつたのではないだろうか。唐僧鑑真の来日による受戒制度の刷新に際し、既存の受戒による僧侶たちの抵抗が存在したことにも象徴されるように、すでにそれまでの仏典受容を背景として教学が形成されていたことを想像させるのである。

これらの一切経の構成の特殊性、多様性の背景には、上述のさまざまな状況があり、それらを包括する一切経を策定する必要があつたと考えられる。したがって、いわば当時の現存仏典の全集成を意図するものになつたといえるが、これは日本独自のスタイルではないかと思われる。それが『勅定一切経』として

国家によって保証されることになつた。

勅定一切経が日本独自のあり方を示していることを確認したが、これが日本独自ゆえにその内容が対外的にも意味あるものであるための証左が必要となつたであろう。その点で注意されるのが将来仏典への依存の問題である。五月一日経が『開元釈教録』による一切経と方針変更した当初、玄昉将来経を一括して借用していたが、道昭の将来した禪院所藏経も早く借用されて⁽³⁴⁾いる。このことは別生経・疑偽経および目錄外経を含みながらも、その将来経ゆえの尊重があると思われる、これも受容側の限界を示すものであろう。これら将来経の信頼性は後世まで尊重されている。さらに勅定一切経を權威あるものにする方途が、将来経・渡来僧による勘経という問題であつただろう。次いで奈良時代の勘経についていくことにする。

二、仏典の勘経とその意義

1、五月一日経の勘経

表2は管見によつて勘経追跋の確認できる五月一日経を一覧にしたものである⁽³⁵⁾。追跋の書式は大きく三種類に分けられるが、その代表的なものは次のようなものである。

a 『過去莊嚴劫千仏名經』卷上（聖語藏）

天平勝宝七歳正月十日從八位上丹波眞外目日置造養麻呂正

正八位上行太学少属内藏伊美吉金成正

大徳興福寺沙門慈訓証

b 『大集経月藏分』卷一（聖語藏）

天平勝宝七歳十月十七日正八位下守少内記林連広野正

大安寺沙門琳鉢読

沙門敬明 沙門玄藏 沙門環忍 沙門行脩証

c 『深密解脱経』卷二（聖語藏）

天平勝宝七歳九月三日從七位上守太学直講上毛野君立麻呂

正

大徳元興寺沙門勝叡

大徳沙門了行

大徳沙門尊応

業了沙門法隆

これらの追跋は本文や願文と筆跡が異なるのは勿論であるが、追跋にみえる官人と沙門の筆跡もそれぞれ異なり、それぞれの自署であつたと思われる。

この勘経追跋で勘経の作業を推定させる記載として「正」「読」「証」の三種があげられる。「正」は一見「校正」の略記かと考えられるが、五月一日経は校生によつてすでに二回の校

正がすまされており、その場合は「一校了」「二校了」などと記されているのでこの記載は校正とは考えられず、勘経に関する記載であつたと思われる。次の「読」であるが、「校訂作業は二人一組で、一方（俗人と僧侶の組合せの場合は僧侶）が読み、他方が聞きながらチェックしていく」と推定される例があることから、勘経のために仏典を音読したことを示すと思われる。そして最後の「証」はそれぞれの勘経作業の確実に済まされたことを証明するという意味といえよう。但し、cには僧名の後には「証」の字がみえないが、勘経を示す記載の「証」が略されているものと思われる。

僧侶の場合は所属寺院を明記するものとそうでないものがあるが、bの場合、琳鉢は「大安寺沙門」と記され、他の行脩・敬明・玄藏・環忍についてもいずれも大安寺の僧侶であり、cの場合も勝叡は「大徳元興寺沙門」記され、他の了行・法隆がいずれも元興寺の僧侶であつたことがわかるので、おそらく一番はじめの僧侶のところでみえる寺院名がすべての僧侶の所属寺院であつたと考えられる。したがって、仏典は寺院ごとに分担し勘経がなされていたともいえる。

限られた史料ではあるが追跋の中で俗人である官人は特定の寺院の僧侶との組み合わせがみうけられ、各寺院ごとに特定の官人が担当していたといえよう。つまり、林連広野は大安寺で、

表2 五月一日經勘經一覽

仏典名	勘經年月日	正	讀	証	所藏
過去莊嚴劫千名經卷上	天平勝宝7・正・10	目置震麻呂・内蔵金成		興福寺慈訓 元興寺勝寂・了行・尊正・法隆	聖語藏 京都國立博物館
持心經卷三	天平勝宝7・9・3	上毛野立麻呂		元興寺勝寂・了行・尊正・法隆	玉井氏・「日本唯識思想史」所引
持心經卷四	天平勝宝7・9・3	上毛野立麻呂		？	
持心經卷十五	天平勝宝7・9・3	？		元興寺勝寂・了行・尊正・法隆	
深密解脫經卷二	天平勝宝7・9・3	上毛野立麻呂		元興寺勝寂・了行・尊正・法隆	聖語藏
深密解脫經卷三	天平勝宝7・9・3	上毛野立麻呂		元興寺勝寂・了行・尊正・法隆	聖語藏
深密解脫經卷四	天平勝宝7・9・3	上毛野立麻呂		元興寺勝寂・了行・尊正・法隆	聖語藏
深密解脫經卷五	天平勝宝7・9・3	上毛野立麻呂		元興寺勝寂・了行・尊正・法隆	聖語藏
等集衆德三昧經卷下	天平勝宝7・9・3	上毛野立麻呂		元興寺勝寂・了行・尊正・法隆	聖語藏
広博嚴淨不退轉輪經卷二	天平勝宝7・9・3	上毛野立麻呂		元興寺勝寂・了行・尊正・法隆	聖語藏
広博嚴淨不退轉輪經卷三	天平勝宝7・9・3	上毛野立麻呂		元興寺勝寂・了行・尊正・法隆	聖語藏
広博嚴淨不退轉輪經卷四	天平勝宝7・9・3	上毛野立麻呂		元興寺勝寂・了行・尊正・法隆	聖語藏
広博嚴淨不退轉輪經卷五	天平勝宝7・9・3	上毛野立麻呂		元興寺勝寂・了行・尊正・法隆	聖語藏
広博嚴淨不退轉輪經卷六	天平勝宝7・9・3	上毛野立麻呂		元興寺勝寂・了行・尊正・法隆	聖語藏
大乘同性經卷上	天平勝宝7・9・3	上毛野立麻呂		元興寺勝寂・了行・尊正・法隆	聖語藏
註楞伽經卷二	天平勝宝7・10・14	上毛野立麻呂		元興寺勝寂・了行・尊正・法隆	聖語藏
註楞伽經卷三	天平勝宝7・10・14	上毛野立麻呂		元興寺勝寂・了行・尊正・法隆	聖語藏
註楞伽經卷五	天平勝宝7・10・14	上毛野立麻呂		元興寺勝寂・了行・尊正・法隆	聖語藏
註楞伽經卷六	天平勝宝7・10・14	上毛野立麻呂		元興寺勝寂・了行・尊正・法隆	聖語藏
註楞伽經卷七	天平勝宝7・10・14	上毛野立麻呂		元興寺勝寂・了行・尊正・法隆	聖語藏
分別經起初勝法問經卷上	天平勝宝7・10・14	上毛野立麻呂		元興寺勝寂・了行・尊正・法隆	聖語藏
分別經起初勝法問經卷下	天平勝宝7・10・14	上毛野立麻呂		元興寺勝寂・了行・尊正・法隆	聖語藏
大集月藏分卷一	天平勝宝7・10・17	林広野	大安寺沙門琳琳	敬明・玄藏・環忍・行簡	聖語藏
大集月藏分卷二	天平勝宝7・10・17	林広野	大安寺沙門琳琳	敬明・玄藏・環忍・行簡	聖語藏
大集月藏分卷三	天平勝宝7・10・17	林広野	大安寺沙門琳琳	敬明・玄藏・環忍・行簡	聖語藏
大集月藏分卷四	天平勝宝7・10・17	林広野	大安寺沙門琳琳	敬明・玄藏・環忍・行簡	聖語藏
大集月藏分卷五	天平勝宝7・10・17	林広野	大安寺沙門琳琳	敬明・玄藏・環忍・行簡	聖語藏
大集月藏分卷六	天平勝宝7・10・17	林広野	大安寺沙門琳琳	敬明・玄藏・環忍・行簡	聖語藏
大集月藏分卷七	天平勝宝7・10・17	林広野	大安寺沙門琳琳	敬明・玄藏・環忍・行簡	聖語藏
大集月藏分卷八	天平勝宝7・10・17	林広野	大安寺沙門琳琳	敬明・玄藏・環忍・行簡	聖語藏
大集月藏分卷九	天平勝宝7・10・17	林広野	大安寺沙門琳琳	敬明・玄藏・環忍・行簡	聖語藏
大集月藏分卷十	天平勝宝7・10・17	林広野	大安寺沙門琳琳	敬明・玄藏・環忍・行簡	聖語藏

久學文庫・第十四回大藏会目錄

大方広十輪經卷一	天平勝宝7・10・17	林広野	大安寺沙門善証	敬明・玄藏・辨祥・環忍・行脩	聖語藏
大輪經卷二	天平勝宝7・10・17	林広野	大安寺沙門行脩	敬明・玄藏・辨祥・環忍	五島美術館
大方広十輪經卷六	天平勝宝7・10・17	林広野	大安寺沙門善証	敬明・玄藏・辨祥・環忍・行脩	聖語藏
十輪經卷七	天平勝宝7・10・17	林広野	大安寺沙門行脩	敬明・玄藏・辨祥・環忍	伊藤佐兵衛・第十四回大藏会目錄

注② 追録例の場合、僧名の列記に「証」の字をもたないが、本表では便宜上「証」の欄に記した。
富貴原敬信『日本唯識思想史』所引の持世経卷十五については、本條が四卷成いは六卷であることから疑問が存す。

上毛野君立麻呂は元興寺でそれぞれ勸経を担当していたと推定される。ところでaの史料の場合、上述の関係からすると日置造養麻呂と内藏伊美吉全成は興福寺ということになるが、慈訓は興福寺僧ではあるものの、天平勝宝三年(七五二)―天平宝字五年(七六一)には法華寺の外嶋院に居住したと考えられることや日置造養麻呂と内藏伊美吉全成のいづれもが外嶋院関係の文書に署名していることから、慈訓らの関与したこの勸経は外嶋院におけるものと思われる。

さて、五月一日経の書写事業が天平勝宝末年まで続いていたことは先に述べたが、たとえば、bの『大集経月藏分』卷一は調男塚によって天平十三年四月に、cの『深密解脱經』卷二(12)は山部花万呂によって天平十三年十一月にそれぞれ書写されたことが知られるので、勸経は時間をかなりおいて行われている。そこで、正倉院文書によってその勸経の様子をみてみたい。

大安寺に宛てた天平勝宝七年五月二十七日付「造東大寺司牒」(統後43 四ノ六一)によれば、造東大寺司が大安寺か

らやつてきた「廻使」に「台一切経」と「圖書寮経」を付して奉請したことがわかるが、大安寺が造東大寺司に遣わした「廻使」の持参した仏典請求の大安寺の牒と思われる断簡文書(統々修38ノ6裏 十三ノ一四四)以下「大安寺牒」と仮称があり、それには、「台一切経内者」のみがみえる。しかし、それらの仏典を先の「造東大寺司牒」に「台一切経内者」とみえる項の仏典と比較するとほぼ一致している。次に「造東大寺司牒」にみえる台一切経と圖書寮経の重複の具合を表にしたものが表3である。これによれば完全な一致をみせないもののかのりの仏典が重複をしている。しかも「大安寺牒」には「於大安寺為勸正」とあつて大安寺において勸経をするための仏典の請求であつたことが知られる。しかし、これだけでは台一切経を勸経したのか、台一切経を証本として圖書寮経を勸経したのかは即座に決めがたい。そこで注目されるのが圖書寮経が「経并軼大唐」と唐からの舶載経であつたことである。おそらく舶載経である圖書寮経によって台一切経を勸経したと理解するの

表3 大安寺宛造東大寺司牒

仏典名(巻数)	台一切経	圖書寮経	仏典名(巻数)	台一切経	圖書寮経
虚空藏菩薩経(1)	○	×	方等般泥洹経(2)	○	×
虚空藏菩薩神咒経(1)	○	○	四童子三昧経(3)	○	○
虚空孕菩薩経(2)	○	○	大悲経(5)	○	○
観虚空藏菩薩経(1)	○	○	普曜経(8)	○	○
無尽意菩薩経(6)	○	○	法華三昧経(1)	○	○
大集譬喻王経(2)	○	×	無量義経(1)	○	○
大哀経(8)	○	○	正法華経00	○	○
宝女所問経(3)	○	○	維摩詰所説経(3)	○	○
無言童子経(2)	○	○	説無垢称経(6)	○	×
自在王菩薩経(2)	○	×	大方等頂王経(1)	○	×
賢迅王問経(2)	○	○	大乘頂王経(1)	○	×
信力入印法門経(5)	○	○	善思童子経(2)	○	○
度諸仏経境界智光厳経(1)	○	○	大悲分陲利経(8)	○	○
仏華嚴入如来德智不思議境界境(2)	○	○	悲華経00	○	○
莊嚴菩薩心経(1)	○	×	舍部金光明経(8)	○	○
大方広菩薩十地経(1)	○	○	純真陀羅尼所問経(2)	○	○
兜沙経(1)	○	×	大樹金那羅王所問経(4)	○	○
菩薩本業経(1)	○	×	仏界切利天為母説法経(2)	○	×
諸菩薩求仏本業経(1)	○	×	道神速無变化経(2)	○	○
菩薩十往経(1)	○	×	般舟三昧経(2)	×	○
漸備一切智徳経(5)	○	○	宝星陀羅尼経00	×	○
十住経(4)	○	○	菩薩念仏三昧経(6)	×	○
等目菩薩所問三昧経(3)	○	×	阿差末経(7)	×	○
顕無辺仏功徳経(1)	○	○	演弥蔵経(2)	×	○
如来興顕経(4)	○	○	拔陵菩薩経(1)	×	○
度世品経(6)	○	○	大乘大集地藏十輪経00	×	○
羅摩伽経(3)	○	○	十輪経(8) ¹⁾	×	○
大般泥洹経(6)	○	×			

注) ①は現存する勘経道跋をもつ五月一日経と一致するもの。

が妥当であろう。つまり、両史料から知られるところは、大安寺が、同寺において「台一切経」を「圖書寮経」を証本として勘経するため、造東大寺司に両仏典の請求を行い、造東大寺司は大安寺の要請に応じて二種の仏典を送ったということである。

ところで、五月一日経が天平十五年四月より「大官一切経」に対して、連続して写されている光明皇后の五月一日経は、『常写一切経』・『宮一切経』とよばれることになった⁽⁴⁾と指摘されており、「宮一切経」の呼称は「皇后宮職」に由来するものと考えられることから、天平勝宝元年に皇后宮職が紫微中台となることで「宮一切経」は「紫微中台一切経」の略称である「台一切経」と称されるにいたったと考えられ、両史料がま

さに五月一日経の勘経に関するものであったと考えられる。さらに「造東大寺司牒」に「廻使」とみえた林連広野は「大安寺牒」には「専受勘経使」とみえ、彼が大安寺における勘経の担当であったと考えられ、これは上述の表1から想定した五月一日経の勘経における林広野と大安寺との関係を証明するものである。

先の「造東大寺司牒」では「今月廿六日牒」によって仏典を奉請したとみえているが、この「牒」が「大安寺牒」ではないことは日付の相違から知られるところである。つまりこの勘経は大安寺でも造東大寺司でもない第三者の「牒」によって命じられたと推測できる。ところが「大安寺牒」では「内宣」によるとみえているので、この勘経が「内宣」つまり内裏宣によって命じられたものであったと考えられる。ただし内裏宣を直接大安寺が受けて行動したというよりも、内裏宣を受けた「牒」によつて命令されたと思われる、おそらくは「造東大寺司牒」にみえる「牒」もこの内裏宣を受けて出されたのであり、その「牒」によつて造東大寺司が行動したものと考えられる。

したがって、「造東大寺司牒」と「大安寺牒」から知られることは、大安寺での五月一日経の勘経は林広野を専当として大安寺で実施されたといえ、しかもその命令は内裏宣によるものであり、その内裏宣を受けた「牒」によつて伝達されたことが

わかる。

大安寺における勘経と同様な例が興福寺にもみられる。天平勝宝七歳四月二十一日付の興福寺宛て「造東大寺司牒」(歴民17 二十五ノ一八五)がそれで、その冒頭には異筆ながら「請山寺階牒」とみえ、大安寺の場合と同様な記載様式となっている。⁽⁴⁵⁾この史料にみえる台一切経と圖書寮経との重複を示した表4によると、やはり多く同一仏典が奉請されていたことが知られるが、それらのことより大安寺と同じく五月一日経の勘経史料と推定される。興福寺宛ての「造東大寺司牒」の末尾には「膳大岡僧妙仙正満僧」とみえている。膳大岡(大丘)は天平勝宝四年頃に入唐学生の際験を持つ人物で、『金剛菩薩註金剛般若経』を招来したと伝え、⁽⁴⁶⁾仏典にも造詣が深かったと思われるので興福寺における勘経の使者となったと考えられ、膳大岡らは大安寺における林広野・僧等鏡と同様な存在であったと思われる。興福寺宛ての「造東大寺司牒」には大安寺の例における「内宣」やそれを受けたと思われる「牒」の記載はみられないが、勘経が実施されるにあたっては同様な事情であったと考えられよう。

ところで先の『過去莊嚴劫千仏名経』卷上(聖語藏)は「大徳興福寺沙門慈訓証」とみえることから興福寺での勘経を想像させるものであったが、興福寺における勘経の専当の官人は膳

表4 興福寺宛造東大寺司牒

仏典名(巻数)	台一切経	圖書寮経	仏典名(巻数)	台一切経	圖書寮経
貝多羅不思惟十二因縁経(1)	○	○	師子奮迅菩薩所問経(1)	○	×
縁起聖道経(1)	○	○	華聚陀羅尼咒経(1)	○	○
稲芋経(1)	○	○	華積陀羅尼神咒経(1)	○	×
了本生死経(1)	○	○	虚空藏菩薩問仏経(1)	○	×
自誓三昧経(1)	○	○	持句神咒経(1)	○	×
如来独証自誓三昧経(1)	○	○	陀鄰尼鉢経(1)	○	×
灌洗仏形像経(1)	○	○	東方最勝燈王如来経(1)	○	○
摩訶利頸経(1)	○	×	善法方便陀羅尼咒経(1)	○	○
竜施女経(1)	○	○	金剛秘密善門陀羅尼経(1)	○	×
竜施菩薩本起経(1)	○	×	護命法門神咒経(1)	○	×
八吉祥神咒経(1)	○	○	内蔵百宝経(1)	○	○
八陽神咒漸経(1)	○	○	湏頼経(1)	○	○
八吉祥経(1)	○	×	温室浴洗衆僧経(1)	○	○
八仏名経(1)	○	○	私訶三昧経(1)	○	○
盂蘭盆経(1)	○	×	菩薩生地経(1)	○	×
報恩奉盆経(1)	○	○	四不可得経(1)	○	○
浴像功德経(1)	○	×	梵女首意経(1)	○	○
按量数珠功德経(1)	○	×	成具光明定意経(1)	○	×
不空絹索神咒心経(1)	○	×	宝網経(1)	○	○
数珠功德経(1)	○	×	菩薩行五十縁身経(1)	○	×
曼殊室利菩薩咒藏中字咒王経(1)	○	×	菩薩修行経(1)	○	○
十二仏明神咒経(1)	○	×	諸徳福田経(1)	○	○
称讃如来功德神咒経(1)	○	×	大方等如来蔵経(1)	○	○
大金色孔雀王咒経(1)	○	×	仏語経(1)	○	○
仏説大金色孔雀王咒経(1)	○	×	金色王経(1)	○	○
孔雀王咒経(2)	○	○	演道俗業経(1)	○	○
大孔雀王咒経(3)	○	×	百仏名経(1)	○	×
十一面觀世音菩薩神咒経(1)	○	×	称揚諸仏功德経(3)	○	×
大仏頂尊勝陀羅尼経(1)	○	×	湏真天子経(3)	○	○
摩利支天経(1)	○	×	摩訶摩耶経(1)	○	○
咒五首経(1)	○	○	除灾恐患経(1)	○	○
種種雜咒経(1)	○	×	李経(1)	○	×
仏頂勝陀羅尼経(1)	○	×	觀世音菩薩受記経(1)	○	×
仏頂(尊)勝陀羅尼経(1)	○	×	海龍王経(4)	○	×
仏頂勝陀羅尼経(1)	○	×	首楞嚴三昧経(3)	○	○
仏頂尊勝陀羅尼経(1)	○	○	觀普賢菩薩行法経(1)	○	×
阿難陀目佉仁訶離陀羅尼経(1)	○	×	不思議光菩薩所問経(1)	○	○
無量門微密持経(1)	○	○	觀藥王藥上二菩薩経(1)	○	○
出生無量門持経(1)	○	○	七俱胝仏大心准提陀羅尼経(1)	×	○
無量門破處陀羅尼経(1)	○	×	如来方便善功咒経(1)	×	○
舎利弗陀羅尼経(1)	○	○	十住断結経(10)	×	○
一向出生菩薩経(1)	○	○	諸仏要集経(2)	×	○
如(妙)臂印幢陀羅尼経(1)	○	×	未曾有因縁経(2)	×	○
勝幢臂印陀羅(尼)経(1)	○	○	超日明三昧経(3)	×	○
無崖際持法門経(1)	○	○	菩薩瓔珞経(10)	×	○
尊勝菩薩所問一切諸法入無量門陀羅尼経(1)	○	×	大法炬羅尼経(12)	×	○
金剛上昧陀羅尼経(1)	○	×	大威徳羅尼経(10)	×	○
金剛場陀羅尼経(1)	○	○	大金色孔雀王呪病結界文(1)	×	○
			賢劫経(13)	×	○

大岡と考えられるので、やはり上述のごとく慈訓と日置義麻呂・内蔵全成の勘経は法華寺外嶋院におけるものと思われる。

以上、五月一日経の勘経が大安寺・興福寺でなされたこと、そしてそれは天平勝宝七歳四月および五月頃に内裏宣を受けた何者かの「牒」（以下の考察からおそらく僧綱牒であろう）によって勘経が命じられたこと、大安寺では林広野が、興福寺では藤大岡が勘経の専当官人となったことなどが明らかになった。また大安寺・興福寺宛ての二通の造東大寺司牒において「台一切経」のみならず圖書寮経の出納が指示されていたことは五月一日経および圖書寮経が当時造東大寺司で管理されていたことが推定され興味深い、特に圖書寮経が造東大寺司の管理を受けていたことは「圖書寮経目録」（続々修12ノ7 十三ノ一七八）や「圖書寮経散帳」（続々修12ノ6 十三ノ一七二）が造東大寺司に残されたことから想定される。圖書寮経が圖書寮より造東大寺司に移されるには、五月一日経の対校テキストとして唐からの舶載経であった圖書寮経が注目され借用され

表5

	寺名	文書目付	命令（来牒）	奉請対象	奉請先
(f)	元興寺	天平勝宝7・8・16	綱所今月十五日牒（内宣）	一切経	法花寺中嶋院
(g)	某寺	天平勝宝7・8・16	今日僧綱牒	一切経	
(h)	泰師寺	天平勝宝7・8・16	僧綱今日牒	一切経	
(i)	大安寺	天平勝宝7・8・16	今月十五日牒	一切経	

たためではないだろうか。

さらに薬師寺・大安寺・元興寺・某寺における五月一日経の勘経を匂わす史料があり、いずれも天平勝宝七歳八月十六日付のもので、「元興寺三綱牒」（統別9 四ノ七一）、「某勘経所牒」（藤芥21裏 四ノ七二）、「薬師寺三綱并勘経所牒」（統別9 四ノ七〇）、「大安寺三綱牒」（統別9 四ノ七一）の四通がある。これらの史料の内容を比較した表5によれば四通の文書はほぼ同一内容に関する一連のものと思われるが、いずれも八月十五日ないし十六日付の「僧綱牒」の命によって「一切経」を奉請することに関する文書といえる。四か寺の文書のうちでその内容を一番詳細に知りうる「元興寺三綱牒」によれば、元興寺は八月十五日に「僧綱牒」（他の三か寺のうち二か寺は十六日付）を受けたが、それは「一切経」を奉請せよという「内宣」によってそれを「法花寺中嶋院」に奉請するように牒したものであり、それによって元興寺は「一切経」を奉請したというのである。この「一切経」という記載によると各寺院に保有する一切経を奉請することが述べられているように、元興寺の関連文書として、

元興寺勘経所解 申勘奉経并末勘事

合玖拾五卷

勘奉八十九卷

未勘六卷楞伽經二卷
注楞伽經四卷

右、今勘奉経并未勘如件、仍錄事狀申送、以解、

天平勝宝七歳八月十七日散位從七位上上毛野君

立万呂

(続修30 四ノ七三)

とみえ、先の「元興寺三綱牒」にいう九十五卷の「一切経」のうち、八十九卷が既勘、六卷が未勘であることを報告しているので、ここである「一切経」とは各寺院の保有したものではない。したがって、ここにみえる「一切経」とは何を指すかが問題となるであろうが、この文書に署名している上毛野立万呂は表1によつて、元興寺における五月一日経の勘経を専当した官人であつた考えられるので、この「一切経」とは大安寺・興福寺と同じく台一切経つまり五月一日経を指し、これらも五月一日経の勘経に関するものであると考えられる。

つまり上述の如く大安寺や興福寺では天平勝宝七歳四月・五月頃に勘経がなされていたが、元興寺や薬師寺においても同様に五月一日経の勘経が実施されていたといえる。また「内裏宣」の命に基づき八月十五・六日の「僧綱牒」によつて五月一日経がいったん法華寺申嶋院に回収されたことがわかるが、元興寺で保管されていた九十五卷のうち六卷は未勘のままであつたことによりこの時期至急回収しなければならぬ理由があつた

たものと思われる。なおこの「某勘経所牒」には興福寺における五月一日経の勘経を専当したと目される膳大岡(大丘)が署名しているので興福寺に関するものであつたかも知れないが、特定の官人が複数の寺院における勘経を担当した可能性も否定しきれないだろう。⁽⁴⁹⁾

さて五月一日経の勘経について今まで大安寺・興福寺・薬師寺・元興寺・外嶋院等で実施され、その命令は「内裏宣」を受けた「僧綱牒」によつて命じられ、その仏典の管理については造東大寺司が関与していたわけだが、勘経を主体的に進めた機関は果たして出納をしていた造東大寺司であつたのであろうか。この問題を検討するため再度勘経に関する推定される天平勝宝七歳二月九日付「外嶋院一切経散帳」(続々修2ノ10 十三ノ一二一―一二三)⁽⁵⁰⁾をみていくことにする。

本史料は追筆の表題に「外嶋院一切経散帳」とみえて外嶋院の關係文書に署名している上毛野君栗守・日置造・大隅君足・田口兄人らが署しているので外嶋院で作成された文書といえるが、「為正、奉請寺々、并奉請内裏」とみえ、仏典を正すために内裏と寺々に奉請した記録である。寺々としては、「薬師寺」「大安寺」「飛鳥寺」「山科寺」という記載がみえるものの、「内裏」という記載はない。しかし仏典名の右肩あるいは右下に「内」とみえるものがいくつかあり、これが内裏へ奉請した

仏典であつたと考えられる。また追筆もまみられ、「如員請了」「請宝積經正所」「請留花嚴講師所」などの追筆がある。

さて追筆の表題に「外嶋院一切経散帳」とみえることから外嶋院に所蔵されていた一切経を外嶋院に貸し出した記録のように感じられるがはたしてそうであらうか。⁽⁹⁾これに關して「外嶋院御願經奉出文」(統々修2ノ10 十三ノ一五二二三)との關係が興味深く、ここには「東大寺所藏紫微中台御願一切経中之經、今奉出内裏説一切経所如件」と見え、これは外嶋院が造東大寺司から奉請した「東大寺所藏紫微中台御願一切経」を内裏に奉請した報告書であるといえる。

表6は「外嶋院一切経散帳」と「外嶋院御願經奉出文」および上述の関連文書を対比した一覽である。これによると「外嶋院一切経散帳」の内裏への奉請を意味すると考えられる「内」が付され、かつ「華嚴講師所」への奉請が追筆された仏典と、「外嶋院御願經奉出文」にみえる仏典とで多く一致することに氣付く。両文書の日付が接近していることから同一の仏典群について語られたものと推定され、「外嶋院一切経散帳」にいう「一切経」とは「東大寺所藏紫微中台御願一切経」に關するものといえる。「華嚴講師」とは慈訓のことで「華嚴講師所」とは外嶋院に所在していたので、内裏から外嶋院へ奉請先が変更され、これらの仏典は天平勝宝七歳八月十七日に「内裏説一

切経所」へ奉請される際、外嶋院から送られることになったと思われる。さらに「外嶋院一切経散帳」のなかで「占察善惡業報經」二卷の割註に「丹波員外目日置造正、又証本可見花嚴講師大德証」とあることが注意される。これらは現存五月一日経の『過去莊嚴劫千仏名經』卷上の勘経が日置養麻呂と内藏全成および慈訓によつて外嶋院で行なわれたとする推測を傍証しうるものであらう。ただこの割註は難解であるが、日置養麻呂が校訂に当たるに際して、証本には先にみた舶載經の圖書寮所藏經によるのではなく、特に慈訓の所持していた本を用いるべきことを指示したものと理解しておきたい。ところで五月一日経は天平勝宝元年以降「台一切経」と称され、それは「紫微中台一切経」の略記であらうと指摘したように、ここにみえる紫微中台一切経とはまさに五月一日経をさすものと考えられる。表6には表2にみえる五月一日経の現存仏典名も註記した(※を付す)。また、表3・4の大安寺・興福寺に宛てられた「造東大寺司牒」の仏典のうち圖書寮經のみで台一切経にはみえない仏典が本史料の該当寺院の項目の仏典とほぼ一致していることがわかる。本史料の年紀が天平勝宝七年二月九日と早いことから、この時点で圖書寮經にしかみえない仏典名の「台一切経」(五月一日経)がすでに大安寺・興福寺に奉請されていたものと思われる。現存する勘経追跋を持つ五月一日経と「外嶋院一

表6 外嶋院一切経散帳と関連文書との対比

(1)

仏典名(巻数)	外嶋院一切経散帳		天平勝宝7.8.17	天平勝宝7.5.27	天平勝宝7.4.21	
	天平勝宝7.2.9	追筆	御願経奉出文	大雲寺経達度大寺同院	保勝寺経達度大寺同院	
放光般若波羅蜜經(3)	薬師寺					
摩訶般若波羅蜜經(8)						
光讚般若波羅蜜經(3)						
光讚般若波羅蜜經(8)						
摩訶般若波羅蜜鈔經(5)						
道行般若波羅蜜經(10)						
小品般若波羅蜜經(8)						
大明度无極經(4)						
勝天王般若波羅蜜經(7)						
文殊師利所説摩訶般若波羅蜜經(1)			小僧都所			
文殊師利所説摩訶般若波羅蜜經(1)						
壽首菩薩无上清淨分衛經(2)						
金剛般若波羅蜜經(1)						
能断金剛般若波羅蜜經(1)						
実相般若波羅蜜經(1)						
仁王護国般若波羅蜜經(2)						
摩訶般若波羅蜜大明咒經(1)						
般若波羅蜜多心經(1)						
大方広三戒經(3)				宝積経正所		
无量清淨平等覺經(2)						
阿弥陀經(2)						
无量寿經(2)						
阿閼鞞国經(2)			宝積経正所			
大乘十法經(1)						
普門品經(1)						
胞胎經(1)						
文殊師利仏土嚴淨經(2)						
法鏡經(2)			宝積経正所			
郁迦羅越門菩薩行經(1)						
幻土仁賢經(1)						
發覺淨心經(2)			宝積経正所			
優填王經(1)						
湏磨提經(1)			宝積経正所			
湏磨提并經(1)						
阿閼鞞王女阿術達并經(1)						
離垢施女經(1)						
得无垢女經(1)						
文殊師利所説不思議仏境界經(2)						
如幻三昧經(4)						
聖善意天子所問經(3)						
太子闍護經(1)						
太子和休經(1)						
慧上菩薩問大善權經(2)						
大乘顯識經(2)						
弥勒菩薩所問本願經(1)						
大乘方等要慧經(1)						
仏遺日摩尼宝經(1)						
摩訶衍宝嚴經(1)						
勝鬘師子吼一乘大方廣經(1)						

仏典名(巻数)	外嶋院一切経散帳		天平勝宝7.8.17	天平勝宝7.5.27	天平勝宝7.4.21
	天平勝宝7.2.9	追筆	御願經奉出文	大安寺經藏所出文	飛鳥寺經藏所出文
毗邪婆闍經(2)	大安寺				
大方等大集經 ⁰⁰					
大方等大集日藏經 ⁰⁰					
大集月藏經 ⁰⁰ ²					
大乘大集地藏十輪經 ⁰⁰					
大方広十輪經(8) ²					
大集須弥藏經(2)					
并念仏三昧經(6)					
大方等大集菩薩念仏三昧經 ⁰⁰					
般若三昧經(3)					
拔陂芥經(1)	飛鳥寺				
大方等大集賢護經(5)					
阿差末經(7)					
宝雲經(7)					
阿惟越致遮經(3)					
不退転宝輪經(4)					
広博嚴淨不退転輪經(6) ²					
不必定入印經(1)					
等集衆德三昧經(2) ²					
集一切福徳三昧經(3)					
持心梵天經(4) ²	内裏				
思益梵天所問經(4)					
勝思惟梵天所問經(6)					
持人芥經(4)					
持世經(3)					
清諸方等覺經(1)					
大方広宝篋經(3)					
大乘同性經(2) ²					
深蜜解脫經(5) ²					
解深蜜經(5)					
解節經(1)	内裏				
粗統解脫地波羅蜜了義經(1)					
縁生諸勝文法本經(2)					
分別縁起初勝法門經(2) ²					
楞伽阿跋多羅宝經(4)					
注楞伽阿跋多羅宝經(4) ²					
入楞伽經 ⁰⁰					
大遼民乾子所説經 ⁰⁰					
不空羂索施羅尼自在咒經(3)		華嚴講師所			
千手千臂觀世音并施羅尼神咒經(2)		華嚴講師所	○		
千手千眼觀世音并広大明滿無礙大悲心施羅尼經(1)	内裏	華嚴講師所	○		
觀世音并秘密藏神咒經(1)		華嚴講師所	○		
觀世音菩薩如意摩尼施羅尼經(1)		華嚴講師所	○		
觀世自在如意心施羅尼咒經(1)		華嚴講師所	○		
如意輪施羅尼經(1)		華嚴講師所	○		
施羅尼集經(12)		華嚴講師所	○		
十一面神咒心經(1)		華嚴講師所	○		
六字神咒經(1)		華嚴講師所	○		

仏典名(巻数)	外嶋院一切經散帳		天平勝宝7.8.17	天平勝宝7.5.27	天平勝宝7.4.21
	天平勝宝7.2.9	追筆	御願經奉出文	大安寺經遠見大寺初院	修羅寺經遠見大寺初院
七俱胝仏大心准提陀羅尼經(1)	山階寺	華嚴講師所	○		圖書寮經
七俱胝仏母准泥大明陀羅尼經(1)		華嚴講師所	○		
六字神咒王經(1)		華嚴講師所	○		圖書寮經
如來方便普巧咒經(1)					
無垢淨光大陀羅尼經(1)		華嚴講師所	○		
請觀世音并消伏毒害羅尼經(1)		華嚴講師所	○		
十住斷結經(10)					圖書寮經
諸仏要集經(2)					圖書寮經
未曾有因緣經(2)					圖書寮經
超日明三昧經(2)					圖書寮經
菩薩瓔珞經(4)					圖書寮經
賢劫經(13)					圖書寮經
大法炬陀羅尼經(20)					圖書寮經
大威德陀羅尼經(20)					圖書寮經
仏名經(13)					圖書寮經
五千五百仏名經(8)					
不思議功德諸仏所護念經(2)					
華手經(13)					
大方広如來秘密藏經(2)	内裏	華嚴講師所	○		
占察善惡業報經(2)		華嚴講師所	○		
大乘造像功德經(2)		華嚴講師所	○		
広大宝樓閣善住秘密陀羅尼經(3)		華嚴講師所	○		
一字仏頂輪王經(4)		内裏			
大陀羅尼末法中一字神咒經(1)		内裏			
蘇悉地羯羅經(3)		内裏			
七仏所説神咒經(4)		内裏			
莊嚴王陀羅尼咒經(1)		内裏			
拔除罪障咒王經(1)		内裏			
善夜經(1)		内裏			
觀自在如意并瑜伽法要(1)		華嚴講師所	○		
不増不減經(1)		華嚴講師所	○		
金剛三昧經(2)					
毗尼母論(8)		華嚴講師所			
宝雨經(10)					
旃陀越國王經(1)		内裏			
解深密經(5)					
五分律(20)		造寺司?			

(注) ※は現在五月一日経で斯經追蹤をもつもの

一切經散帳」の關係で天平
聰氏も指摘されている如
く、勘經追蹤をもつ五月
一日経の現存状況は「外
嶋院一切經散帳」にみえ
るそれぞれ勘經された寺
院の項と一致し、勘經追
跋の日付からも矛盾する
ものではないのである。
以上のように「外嶋院
一切經散帳」が五月一日
経の勘經に関する史料で
あるとなると、ここにみ
える仏典の大部さからこ
の勘經における外嶋院の
占める位置が目されて
くる。また一時外嶋院と
同じ法華寺内の中嶋院に
勘經中の五月一日経が回
取されていたことも注意
される。それとともに造

東大寺司との関係も問題となるであろう。五月一日経とそれを対校するための圖書寮経が造東大寺司にあったのであるから、やはりそれは造東大寺司にあてたものであったと考えるのである。

さて五月一日経と圖書寮経をめぐっての外嶋院と造東大寺司の関係で注意されるのは仏典を管理するシステムであろう。その点で興味深い史料は造東大寺司の「経疏出納帳」（麁芥30裏三ノ六四二一）の次の史料である。このうちに『遺教経論』一卷が天平勝宝六年四月五日に造東大寺司次官佐伯宿祢の宣によつて唐和上『鑑真の所へ送られたことが記されるが、『写経雜物出納帳』（麁芥35裏 四ノ二三二）から実際には仏典は外嶋院から送られたことがわかる。したがって仏典は外嶋院にあったのでありそこから転送されたわけである。この史料は造東大寺司に宛てられた文書をつないだ帳簿にあるものである。これは恐らく前者の史料が仏典管理の正式な出納帳簿として帳簿上は造東大寺司を管理主体として、公式には造東大寺司と貸出し先の関係を記載するものであり、現実の仏典の移動はこのケースのように転送されるような場合もあったであろう。つまり、五月一日経と圖書寮経をめぐっても造東大寺司は単なる管理機関であり、勘経はむしろ外嶋院主導の下で進められたと考えられる。したがって、外嶋院から出された五月一日経の奉請先の報

告文書を受けた造東大寺司は、その文書に「外嶋院一切経散帳」と追筆したのであり、それは外嶋院に貸出した「一切経」（『五月一日経』）の「散帳」を意味したものと思われる。

一方「外嶋院御願経奉出文」の日付は天平勝宝七歳八月十七日になっており、この日以前に「内裏読一切経所」に仏典が奉請されたことがわかるが、上述の四か寺の牒に天平勝宝七歳八月十五日ないし十六日の「僧綱牒」によつて勘経途中の五月一日経がにわかに法華寺中嶋院に回収されたことと関連するものと思われる。つまりこれら勘経途中の五月一日経も「内裏読一切経所」に奉請されなければならなかったが、それは五月一日経の勘経事業の主体の一部であつた中嶋院にいったん回収されてのち内裏へ奉請されたことを意味し、勘経事業の主体がやはり法華寺であつたことをうかがわせる。

ところで上述の五月一日経の勘経史料で仏典名の判明するものはすべて大乘仏典であつたが、この「外嶋院一切経散帳」では『施陀越国王経』『五分律』『毗尼母論』の三部は小乗経律に属するものである。これによつて主に大乘仏典類がまず最初に勘経され、ついで小乗仏典類に進んでいったのではないかと推測される。

五月一日経の勘経が実際の書写よりかなり時間を経てなされたことは先に述べたが、その目的は何であつたのだろうか。五

月一日経の勘経追跋の年紀とはほぼ同じ頃に書写された現存奈良朝写経に善光朱印経がある。善光朱印経とは、巻首部表紙と第一紙の縫目裏や奥題下に無郭の隸書体朱印「善光」を捺す一連の古写経である。この古写経については田中槐堂氏や山本信吉氏の見解があるが、大平聡氏によつて詳細な検討がなされている⁽⁵⁴⁾。善光朱印経の特色としてはその奥書にあり、例えば『中阿含経』巻九の奥書には、

天平宝字元年潤八月十日式部位下少初位下上毛野君大河校
本経

覆位興福寺沙門行禪証

天平宝字三年九月廿七日散位少初位下一難宝郎写

坤宮舍人少初位上秦忌寸忍国初校

左大舍人少初位上大隅忌寸君足再校

散位従八位下大綱君広道参校

装書匠散位少初位上秦忌寸東人装

用穀紙卅一張

とみえている。これら奥書について大平氏は「例えば、著名な光明皇后発願の『五月一日経』では、『天平十二年五月一日記』と願文の結ばれた後に、校勘に関する記録のある例がみられるが、これは書写時期との間にかんりの時間的懸隔があり、まさに後の書き入れといえよう。従つて、本経の校勘から装丁まで

の作業記録を奥書とするのはこの一連の写経からである可能性が高い。そして、この写経以後、同様な書式に明らかに従っていると思われる仏典奥書が散見されるのである⁽⁵⁵⁾とされ、興味深い奈良朝写経であることを指摘されている。

大平氏は善光朱印経の「善光」とは法華寺の寺主を努めた善光尼のことであり、善光朱印経が善光尼の主導下に法華寺の写経所で実施された一切経書写事業であると指摘されたが、五月一日経の勘経が法華寺の外嶋院の主導になされたこと、両事業の時期が接近していることなどから密接な関係があると考えられる。

善光朱印経のうち「勘本経」と記されたものを一覧にしたのが表7である。五月一日経の勘経と関連して注目されるのは天平勝宝年間の底本の勘経者が内蔵全成と上毛野立麻呂と同一の人物をみいだすことである。さらに表7によると勘経の史料は天平勝宝七歳十月から天平宝字二年五月となつてゐるが、天平勝宝年間に勘経された仏典は大乗仏典であり、天平宝字年間に勘経されたものはすべて小乗仏典となつており、史料制約を考慮しても大乗仏典から小乗仏典へと勘経・書写が進められたと考えられ、五月一日経の勘経のはとんど大乗仏典類であつたことと連続している印象を持つのである。ただ五月一日経の場合のような特定官人と特定寺院の関係といったことは認められ

表7 善光寺印経勘経一覧

仏典名	勘経年月日	校本経	讀	証	所蔵
僧伽吒経卷二	天平勝宝7・10・18	内蔵金成	元興寺沙門善覺	元興寺沙門慶順	京都・大徳寺
大威徳陀羅尼経卷十	天平勝宝8・4・20	上毛野立麻呂		興福寺沙門行禪	京都・大徳寺
大威徳陀羅尼経卷十二	天平勝宝8・6・21	上毛野立麻呂		興福寺沙門行禪	埼玉・善光明寺
大威徳陀羅尼経卷十七	天平勝宝7・6・21	上毛野立麻呂		興福寺沙門行禪	京都・大徳寺
中阿含経卷九	天平宝字元・閏8・10	上毛野大河		興福寺沙門行禪	兵庫・小川清太郎氏
中阿含経卷十一	天平宝字元・閏8・26	上毛野大河		興福寺沙門行禪	東京・安田一氏旧蔵
中阿含経卷十四	天平宝字元・閏8・25	上毛野大河		興福寺沙門行禪	京都・醍醐寺
中阿含経卷十五	天平宝字元・閏8・28	上毛野大河		興福寺沙門行禪	京都・福寿院
中阿含経卷十六	天平宝字元・9・15	上毛野大河		興福寺沙門行禪	京都・福寿院
中阿含経卷二十九	天平宝字元・9・15	上毛野大河		興福寺沙門行禪	京都・智恵院
中阿含経卷三十四	天平宝字元・9・17	上毛野大河		興福寺沙門行禪	五島美術館
中阿含経卷三十九	天平宝字元・9・28	上毛野大河		興福寺沙門行禪	福井・万徳寺
中阿含経卷四十二	天平宝字元・10・11	上毛野大河		興福寺沙門行禪	京都・大徳寺
中阿含経卷四十九	天平宝字元・10・17	上毛野大河		興福寺沙門行禪	京都・大徳寺
増壹阿含経(卷二十一)	天平宝字2・2・27	藥師寺沙門善岸	元興寺沙門善覺	奈良・福井孝順氏	
増壹阿含経卷二十二	天平宝字2・3・27	藥師寺沙門善岸	元興寺沙門善覺	『続古経題跋』	
増壹阿含経卷二十三	天平宝字2・3・27	藥師寺沙門善岸	元興寺沙門善覺	奈良・法隆寺	
増壹阿含経卷二十九	天平宝字2・3・27	藥師寺沙門善岸	元興寺沙門善覺	京都・智積院	
増壹阿含経卷三十二	天平宝字2・4・21	藥師寺沙門善岸	元興寺沙門善覺	和歌山・金剛峰寺	
増壹阿含経卷三十六	天平宝字2・4・21	藥師寺沙門善岸	元興寺沙門善覺	神奈川・遊行寺	
増壹阿含経卷四十九	天平宝字2・5・11	藥師寺沙門善岸	元興寺沙門善覺	東京・安田一氏旧蔵	
増壹阿含経卷五十	天平宝字2・5・11	藥師寺沙門善岸	元興寺沙門善覺	奈良・藥師寺	

ない。しかし『大威徳陀羅尼經』の勘經に「興福寺沙門行禪」が関与したことは、圖書寮經の『大威徳陀羅尼經』が興福寺に奉請され(表4参照)、興福寺での勘經が推定されることと一致するのである。実際大平氏も外島院における一切経の勘經事業を指摘され、「本經(『善光朱印經』筆者註)の校訂作業は諸寺の勘經成果に依存した部分が大きかった(天平勝宝期)」とされている。さらに外島院を中心とした法華寺における勘經について「外島院は『五月一日經』を底本に一切経書写を企図し、南都諸大寺、僧侶を動員してまず本經の校訂作業に着手した」と、五月一日経の勘經が善光朱印經の底本の校訂であることを示唆されている。

以上、五月一日経の勘經は写經を前提とした底本の勘經であり、その写經とは現存する善光朱印經をその有力な候補にあげられるのではないかと考える。

さて、いわゆる善光朱印經の写經事業に際して、五月一日経を写經の底本とするために、天平勝宝年間に五月一日経を唐からの舶載經である圖書寮經によつて勘經されていたことを推察してきたが、ここで一つの疑問が生じてくる。それは善光朱印經の写經事業においてなぜ舶載經である圖書寮經でわざわざ勘經してまで五月一日経をその底本にしたかということである。仏典のテキストとしての正確度でいえば、おそらく勘經のテキ

ストとされた唐經である圖書寮經の方がすぐれていると思われる。圖書寮經を底本にする方が正確で手取り早いと思われるのである。この点については、前にふれたように五月一日経が勅定一切経として、一切経の基準兼テキストとして重視されたためであらう。さらに舶載經である圖書寮經で勘經されたことは、その構成の特異性に対して權威を付与する目的をもっていたと考えられる。ただし、權威保証の行為とはいえ、勘經というテキストの内容にかかわるような検討を企図したことは、勅定一切経の特異性と眼界性を意識していたことであり、単に写經するだけではなく、次第に仏典内容にかかわる関心が生まれてきたことの証左ともいえよう。この点をより考えるために、同時期におこなわれた『大宝積經』の勘經をみていくことにする。

2. 『大宝積經』の勘經

天平勝宝七歳における『大宝積經』の勘經⁽⁶¹⁾に関わる史料は豊富なものとはいえないが、次のような史料がある。

A 「経疏出納帳」⁽⁶²⁾

B 天平勝宝七歳二月九日付「外島院一切経散帳」(続々修

2ノ10 十三ノ一二二一)

C 天平勝宝七歳三月二三日付「奉写宝積経所牒」(続々修

16ノ2 十三ノ一三三二)

D 天平勝宝七歳三月二三日付「奉写宝積経所牒」(続々修
16ノ2 十三ノ一三三)

E 天平勝宝七歳三月一六日付「薬師寺三綱并勘経所牒」
(続別9 四ノ七〇)

F 天平勝宝七歳五月二一日付「勘大宝積経所牒」(続別5
四ノ六〇)

G 「経疏帙籤等奉請帳」(続々修15ノ4 十三ノ一九二)

H 「圖書寮経散帳」(続々修12ノ6 十三ノ一七二)

I 「出納帳断簡」(続々修16ノ7裏 十三ノ二二一)

これら勘経史料を、日付・仏典名・勘経機関・関係者を一覧
表にしたものが表8である。これにそつて『大宝積経』の勘経
事業の概要を追っていくことにしたい。

まず『大宝積経』の勘経では、どのような性格の仏典が対象
になっているかをみてみると、関係史料にみえる仏典は大きく
二つにわかれ、一つは五月一日経であり、もうひとつが圖書寮
経である。先にみた五月一日経の勘経の事例から、五月一日経
を圖書寮経を証本として校勘したと考えられる。

勘経の開始時期はいつごろになるであろうか。年紀の早いも
のではBの天平勝宝七歳二月九日があるが、勘経に関する部分
は追筆であり、その明確な時期はわからないので、Aの天平勝
宝七歳三月二十二日が初見となる。そしてこれが開始時期であ

ろうことに關しては、そこにみえる奉請仏典が示唆的である。

そこには五月一日経の『大宝積経』全一二〇巻と『開元釈教
録』十九巻がみえるのである。前者は『大宝積経』そのもので
あり、後者は仏典を検索する場合に不可欠な存在である経録で
あることから、これが実質的な開始とみてよいであろう。また
対校の証本である圖書寮経もこの前後で奉請されたと推定され
るが、Hによれば、圖書寮経の『大宝積経』の奉請が四月二十
二日以前と考えられることも時間的な整合性が認められる。
ただし、これは実質的な事業開始を意味すると考えられ、この
計画や実施に関する命令は、もちろんそれ以前のことになるで
あろう。

次いで開始後の進捗状況であるが、三月二十二日以後、三月
から五月までは比較的頻繁に關係史料がみられ、着実に進捗し
ていたと思われる。ところが、その後は史料が激減しているの
である。このような史料のありようの一つの解釈としては、勘
経事業そのものが五月頃に完了したとするものであろうが、実
際には少なくともEの八月十六日まで稼働していたと推定さ
れるのでこの解釈は難しいであろう。もう一つの解釈として、
その進捗が停滞したと考えることができる。もちろん史料の残
存状況を考慮しなければならぬのであるが、勘経の停滞とい
う解釈は奉請された仏典の状況からも首肯しうと考える。

表8 『大宝積経』勘経関係史料一覧

(1)

天平勝宝7歳	宮一切経(五月一日経)	圖書寮経	機関名	関係者	史料
3月22日	大宝積経120巻 開元釈教録1部19巻 大菩薩藏経20巻○ 菩薩藏経3巻○ 菩薩夢経2巻○ 法界体性経2巻○ 十法経1巻○		勘大宝積経所		(A)
3月23日		无量清浄平等覚経2巻 大乘十法経1巻 普問品経1巻* 胞胎経1巻* 文殊師利仏土厳浄経2巻* 郁迦羅越問菩薩行経1巻 優填王経1巻* 発覚浄心経2巻 須摩提経1巻 阿闍世王女阿術達菩薩経1巻 文殊師利所説不思議仏境界経2巻 幻土三昧経4巻 太子娑羅経1巻 慧上菩薩問善権経2巻 大乘方等要慧経1巻	奉写宝積経所	池原君栗守 (受使)三島岡万呂	(C)・(D)※は(D)にのみ見える経典)
3月26日		根本説一切有部毘奈耶雜事2巻(巻11・12)			(I)
3月27日	文殊師利問菩薩経1巻 文殊師利巡行経1巻 文殊師利行経1巻 文殊師利問経2巻 文殊師利(問)菩薩署経1巻				(A)
3月29日		阿闍世王経2巻 善臂菩薩経2巻○			(1)
3月30日		護国菩薩所問経2巻○			(1)
4月3日	移識経2巻○				(A)
4月5日	根本説一切有部毘奈耶雜事2巻(巻11・12)○ 菩薩見実三昧経14巻○ 優婆塞問仏経1巻		宝積経校所		(A)
4月16日	文殊師利仏度厳浄経2巻 毘耶沙問経2巻 決定毘尼経1巻 大方広三戒経3巻		宝積経校所		(A)
4月22日以前		大宝積経120巻		気太命婦	刊
4月26日	宝篋経1部2巻		宝積経校所		(A)
4月22日～ 5月6日		密迹金剛力士経8巻○	宝積経勘所	(便使)大隅公足	刊

②

天平勝宝7歳	宮一切経(五月一日経)	國書寮経	機関名	関係者	史料
5月6日		善賢菩薩所問經2卷 [◎] 護國菩薩經2卷 [◎] 宝梁經2卷	宝積經勘所	(舎人)大隅公足	4f
5月6日	大菩薩藏經20卷 [◎] 善臨見夾三昧經14卷 [◎] 密迹金剛力士經5卷 菩薩藏經3卷 [◎] 宝賢菩薩所問經2卷 移識經2卷 [◎] 法界体性无差別經2卷 [◎] 善臨夢經2卷 [◎] 根本説一切有部毘奈耶雜事2卷(卷11・12) [◎] 海竜王説法印經1卷 弥勒菩薩所問經2卷 十法經1卷 [◎] 一切経目錄2卷 開元釈経録1卷(卷11)		鷗院	上毛野栗守 (使)大隅公足	(G)
5月21日	大方等住意天子所問經4卷 迦葉經3卷 郁伽長者所問經1卷 无畏徳女經1卷 大宝積經1卷		勘大宝積(経)所 (大宝積経勘所) ・鷗院(C)	(便使)大隅公足	(A)・ (C)
		大方等善住意天子問經4卷 密迹金剛力士經8卷 [◎] 迦葉經3卷 郁伽長者所問經1卷 無畏徳女經1卷 大宝積経1卷	勘大宝積経所	池原君栗守 (使)大隅君足	(f)
2月9日以後	无量清淨平等覚経2卷 大乘十法経 郁伽羅越問菩薩經1卷 発覚浄心経2卷 須摩提経1卷		宝積経正所		(B)
8月16日	(18巻)		宝積経正所		(E)

注) 〇・◎は奉讀記録が提出して見える經典で、○が1度目、◎が2度目に当たること示す。

先に開始時期である三月二十二日に仏典検索に不可欠な『開元釈教録』が奉讀されたと述べたが、実はAには「開元釈教録一部十九卷」と記され、全二十卷であるはずの『開元釈教録』としては一巻足りないのである。この一巻不足は、一見すると取るに足らないようなことと思われるが、その不足分の巻がどこに当たたるかが問題のように思われる。これに関して、Gによれば、五月六日に「開元釈教録一巻第十一巻」が奉讀されたことが知られる。いづれも五月一日経であることから、この一巻が先の「開元釈教録一部十九巻」とセットになると考えられ

よう。つまり当初欠けていたのは『開元釈教録』巻十一であった。この巻は『開元釈教録』の構成でいうと「有訳有本録」(巻十一・十三)にあたり、これは、『開元釈教録』ができた当時、訳者が知られ、しかも現存している仏典のリストに該当する。さらにその内でも巻十一は、宝積部の仏典のデータが収載されている巻で、『大宝積経』全一二〇巻の全体像を解説する部分も含まれている。したがって、勘経事業の当初にあたって、これを欠くということは、『大宝積経』の勘経にとって極めて重大な障害であつたと考えられる。しかもその重要な巻が勘経の実質的開始の三月二十二日から一ヵ月以上も経過して、五月六日によりやく入手しえたのである。つまり『大宝積経』の勘経事業を取り巻く状況は、決して恵まれた環境でなかつたと思われるのである。このような状況を考慮するならば、先に推測したように五月以後の勘経史料の乏しさは、勘経事業の停滞と考えるのが合理的であろう。

ところで大平氏も指摘されているが、この勘経において同一仏典が二度にわたり奉請された記録がみられる。そのような事例について、表8には、一度目にあらわれた箇所○印、二度目にあらわれた箇所には◎印を、それぞれ仏典名に付している。これでわかるように二度目の奉請記録が、奇しくも五月六日に集中している。つまり、このありようは恐らく『開元釈教録』

巻十一の入手を待つて、不確かな仏典に関わる勘経を再度行なおうとしたためではないだろうか。またこの「一切経目録二巻」が奉請されていることも注意される。

次にこの勘経を行つた勘経機関であるが、「勘大宝積経所」「奉写宝積経所」「宝積経校所」「宝積経勘所」「大宝積経所」「大宝積経勘所」「勘大宝積経所」「宝積経正所」と種々の呼称で呼ばれていたことがわかるが、その所在地は法華寺の「嶋院」にあつたらしいことは、五月二十一日の項で、仏典の奉請先としてAでは「勘大宝積(経)所」とするところを、Gでは「嶋院」としていることから確實である。ただし当時「嶋院」とは外嶋院と中嶋院の総称であつたと考えられるので、具体的にはどちらかであつたと思われる。これに関しては大平氏は中嶋院に比定されている。確かに同時期の外嶋院は、五月一日経の勘経事業にかかりつきりであつたと思われ、また造東大寺司側で外嶋院から送られたBの帳簿に「請宝積経正所」などと註記することなどから、外嶋院に比定するのは難しいので、氏の見解に従いたい。また勘経機関の呼称で「奉写宝積経所」とみえるものがあるので、書写を前提とした勘経であつたように思われる。しかし、実際に書写に及んだかどうかについては、先の勘経事業自体の停滞から考えてそこまではいたらなかつたと考えることができよう。

さて勘経に關与したと思われる官人としては池原栗守・大隅公(君)足・三島岡万呂の三人が知られる。所見の頻度からすると、池原栗守が担当責任者として、実際の仏典奉請の使者としては大隅公足が当たっていたものと思われるが、この両者の關係は他の文書にみえる場合も同じものであった。⁽⁶⁵⁾責任者である池原栗守は、天平勝宝六年に上毛野栗守としてみえてより、嶋院、中嶋院、外嶋院の文書にも頻りにみられ、のち紫微少疏にもなった人物である。⁽⁶⁶⁾もう一人、後宮として關与した氣太命婦は、光明子や孝謙天皇に仕えた氣太十千代であろうと推定されている。勘経に關与した人物が上記のようであつたことから、やはり光明子の意圖を受けたものと考えるのがよいであろう。

一方、氣太十千代以外の勘経の關係者はすべて、五月一日経の勘経を前提とした善光朱印経の書写、校正などにあたつてゐるのである。⁽⁶⁷⁾先に『大宝積経』の勘経が五月頃より停滯したこと、また書写を前提としながらもそれに至らなかつたであろうことを推定したが、その理由は、『大宝積経』の勘経に關わつた人々が五月一日経の勘経、善光朱印経の書写という大事業に動員されたためと考えられる。

以上、『大宝積経』の勘経は、法華寺中嶋院に所在した勘経機関(宝積経正所・奉写宝積経所・宝積経校所・宝積経勘所・勘大宝積経所など)ですすめられ、天平勝宝七歳三月二十二日

頃に始まり五月頃までは順調に進捗したが、五月一日経の勘経とそれに伴う善光朱印経の書写事業の余波を受け、次第に事業は停滯していったらしい。しかし、少なくとも八月半ばまでは実施されていたと思われる。そして、当初の計画であつた書写にまでは及ばなかつたと考えられる。勘経機関では、池原君栗守の担当のもと、主に大隅公足が使者となり仏典の調達にあたつてゐる。さらに勘経に際しては、五月一日経の勘経と同様に五月一日経を底本とし、舶載経である圖書寮経によつて校勘がなされた考えられる。また勘経には光明子の意志によるものであつたと推定される。

『大宝積経』の勘経は、基本的には五月一日経と同様な形態であつたわけであるが、五月一日経が一切経であるのに対して、この勘経が『大宝積経』という特定の仏典であることから、若干事情が異なることが予想される。しかも『大宝積経』の勘経といひながら、『大宝積経』だけではなく多くの仏典が利用されているのも注意される。そこで『大宝積経』とはいひながら仏典なのかを考慮に入れて、さらに考えなければならぬ。

さて、『大宝積経』は、四十九卷一二〇卷からなる大部な仏典で、唐の菩提流志の撰にかかり、神龍二(七〇六)年に着手し、先天二年(七一三)開元一・和銅六に完成した。この大部な仏典は、漢訳の仕方から大きく二つに分類でき、二十六会

三十九巻が梵本から菩提流志が新たに訳出したもので、残りの二十三会八十一巻は既訳の漢訳本を菩提流志が梵本によって勘合したものである。⁽⁶⁸⁾ただし、この構成が菩提流志の創出なのか、以前から存在するものかは判然としないという。⁽⁶⁹⁾

前述のように『開元釈教録』巻十一の宝積部の先頭に『大宝積経』が掲出されて、第一会から第四十九会までについて、会名、巻数、訳出者（菩提流志の新訳か、既訳の編入か）、漢訳が単本か重本か、既訳の編入の場合は本名、また総巻数の何巻に当たるか、などのデータを摘記している。また菩提流志の新

訳にかかるもので、重本については、同本異訳本、つまりもと
の梵本は同じで、漢訳の異なる他の本の存在も記されている。
これによって『大宝積経』の構成を一覧表にしたものが表9で
ある。

一方、『開元釈教録』巻二十の末には、各々の理由によって
入蔵しなかった一一八部二四七巻の仏典を列記している。ここ
では単に仏典名と入蔵しない理由を記すのみであるが、貞元一
六（八〇〇）年に成立した円照撰『貞元新定釈教目録』巻三十
の末には「不入蔵目録」として、まったく同じ一一八部二四七

同 本 異 訳 本	
大方広三戒経(3巻、曇無讖・1訳)	
無量清浄平等覺経(無量清浄経、2巻、支婁迦讖・2訳)	
大阿弥陀経(阿弥陀三耶三仏薩婆仏檀過度入道経、2巻、支謙・3訳)	
無量寿経(2巻、康僧鎧・4訳)	
阿閼仏国経(阿閼仏刹諸菩薩学成品経、2巻、支婁迦讖)	
法界体性経(堂寿)	
大乘十法経(仏住王舎城、衆鎧=僧迦婆羅)	
普門品経(普門経、1巻、竺法護・1訳)	
胞胎経	
文殊師利仏土	
菩薩藏経(竺法護)	
法鏡経	
郁迦羅越問菩薩行経	
決定毘尼経	
発覺浄心経	
優填王経	
須摩提経	
妙慧童女経(流志先訳)	
阿闍世王女阿術達菩薩経	

表9 『大宝積経』(49会120巻)

総巻数	会数	会名	巻数	新旧	単重	訳者
巻1～3	第1	三律儀会	3巻	新訳	重本 2訳	(菩提流志)
巻4～7	第2	無辺莊嚴会	4巻	新訳	単本 1訳	(菩提流志)
巻8～14	第3	密迹金剛力士会	7巻	旧訳	単本勘編入	密迹金剛力士経(竺法護)
巻15～16	第4	淨居天子会	2巻	旧訳	単本勘編入	菩薩說夢経(竺法護)
巻17～18	第5	無量寿如来会	2巻	新訳	重本 11訳	(菩提流志)
巻19～20	第6	不動如来会	2巻	新訳	重本 2訳	(菩提流志)
巻21～25	第7	被甲莊嚴会	5巻	新訳	単本 1訳	(菩提流志)
巻26～27	第8	法界体性無分別会	2巻	旧訳	重本勘編入	法界体性無分別経(曼陀羅仙・2訳)
巻28	第9	大乘十法会	1巻	旧訳	重本勘編入	大乘十法経(仏陀爾多・2訳)
巻29	第10	文殊師利普門会	1巻	新訳	重本 3訳	(菩提流志)
巻30～34	第11	出現光明会	5巻	新訳	単本 1訳	(菩提流志)
巻35～54	第12	菩薩藏会	20巻	旧訳	単本勘編入	(玄奘)
巻55	第13	仏為阿難說兜胎会	1巻	新訳	重本 2訳	(菩提流志)
巻56～57	第14	仏説入胎藏会	2巻	旧訳	単本勘編入	仏為難陀説出家入胎経(義浄)
巻58～60	第15	文殊師利授記会	3巻	旧訳	重本勘編入	文殊師利授記経(実叉難陀・3訳)
巻61～76	第16	菩薩見実会	16巻	旧訳	単本勘編入	菩薩見実経(那連提耶舎)
巻77～79	第17	富楼那会	3巻	旧訳	重本勘編入	菩薩藏経(大悲心経、鳩摩羅什・2訳)
巻80～81	第18	護国菩薩会	2巻	旧訳	単本勘編入	護国菩薩経(闍那崛多)
巻82	第19	郁伽長者会	1巻	旧訳	重本勘編入	郁伽長者経(康僧鎧・3訳)
巻83～84	第20	無尽伏藏会	2巻	新訳	単本 1訳	(菩提流志)
巻85	第21	授幻師跋陀羅記会	1巻	新訳	重本 2訳	(菩提流志)
巻86～87	第22	大神变会	2巻	新訳	単本 1訳	(菩提流志)
巻88～89	第23	摩訶迦葉会	2巻	旧訳	単本勘編入	摩訶迦葉経(月婆首那)
巻90	第24	優波離会	1巻	新訳	重本 2訳	(菩提流志)
巻91～92	第25	発勝志樂会	2巻	新訳	重本 3訳	(菩提流志)
巻93～94	第26	善臂菩薩会	2巻	旧訳	単本勘編入	善臂菩薩経(鳩摩羅什)
巻95	第27	善順菩薩会	1巻	新訳	単本 1訳	(菩提流志)
巻96	第28	勸授長者会	1巻	新訳	単本 1訳	(菩提流志)
巻97	第29	優陀延王会	1巻	新訳	重本 2訳	(菩提流志)
巻98	第30	妙慧童女会	兼後1巻	新訳	重本 4訳	(菩提流志)
	第31	恒河上優婆夷会	兼前1巻	新訳	単本 1訳	(菩提流志)
巻99	第32	無畏德菩薩会	1巻	旧訳	重本勘編入	無畏德菩薩経(仏陀爾多・5訳)

巻を掲載しているのので、『開元釈教録』成立の段階で、重複等で書写の必要なしと撰者智昇が選択したものがこの一群の仏典と考えられる。『開元釈教録』の「不入藏目錄」⁽⁷⁰⁾というべきところに、菩提流志が既訳の漢訳本を梵本によって勘合した二十三会八十一巻のうち二十二部八十巻のものと本が記載され、註記として「右密迹力士経下二十二部合八十巻、並編入大宝積經藏中、故無別本」とみえている。これらは別生經⁽⁷¹⁾として存在していたと思われるが、智昇によって不入藏仏典とされたわけである。

さて上にみたように『大宝積經』の同本異訳本や別生經の存在が知られたわけであるが、これらと関係史料にみえた仏典を比較するときわめて興味深いものがある。関係史料に散見する仏典名のうち経録類など一部を除くものと同本異訳本を比較したものが表10であり、別生經と比較したものが表11である。

ところで一部の仏典を除くと断つたが、経録類は問題はないとして、その他の仏典をどのように考えるかが問題になる。しかし、A・G・Iにみえる『根本説一切有部毘奈耶雜事』は、『開元釈教録』卷二十の小乗律に所載されるもので、義浄訳で全四十巻からなっている。ところが、史料上では二巻のみでみえ、『右二帙二二卷』(A)、『第二帙第一二卷』(G・I)と註記している。これは第二帙の一・二巻を意味すると思われる。これは第二帙の一・二巻を意味すると思われる。実は『開元釈教録』卷十一には『大宝積經』仏説入胎藏会に「此入胎藏会本名仏為難陀説出家入胎經在根本説一切有部毘奈耶雜事第十一二卷」との註記があり、また卷九にも義浄訳「仏為難陀説出家入胎經」が所載され、「出根本説一切有部毘奈耶雜事第十一二卷」とみえている。つまりこれもまた『大

同 本 異 訳 本
離垢施女經 得無垢女經
文殊師利所說不思議仏境界經(流志先訳)
如幻三昧經 聖善住意經 太子刷護經 太子和休經 慧上菩薩問大善權經 顯識經
大乘方等要慧經
弥勒菩薩所問本願經
摩訶衍実厳經 遺日摩尼室經
大般若曼殊室利分經 文殊般若經(衆鑊) 大集經宝髻品 菩薩淨行經(康僧会) 勝鬘師子吼一乘大方便經 毘耶娑問經

宝積經』の同本異訳本や別生經の存在が知られたわけであるが、これらと関係史料にみえた仏典を比較するときわめて興味深いものがある。関係史料に散見する仏典名のうち経録類など一部を除くものと同本異訳本を比較したものが表10であり、別生經と比較したものが表11である。

ところで一部の仏典を除くと断つたが、経録類は問題はないとして、その他の仏典をどのように考えるかが問題になる。しかし、A・G・Iにみえる『根本説一切有部毘奈耶雜事』は、『開元釈教録』卷二十の小乗律に所載されるもので、義浄訳で全四十巻からなっている。ところが、史料上では二巻のみでみえ、『右二帙二二卷』(A)、『第二帙第一二卷』(G・I)と註記している。これは第二帙の一・二巻を意味すると思われる。これは第二帙の一・二巻を意味すると思われる。実は『開元釈教録』卷十一には『大宝積經』仏説入胎藏会に「此入胎藏会本名仏為難陀説出家入胎經在根本説一切有部毘奈耶雜事第十一二卷」との註記があり、また卷九にも義浄訳「仏為難陀説出家入胎經」が所載され、「出根本説一切有部毘奈耶雜事第十一二卷」とみえている。つまりこれもまた『大

総巻数	会数	会名	巻数	新旧	単重	訳者
巻100	第33	無垢施菩薩応弁会	1巻	旧訳	重本勘編入	無垢施菩薩応弁経(顯道真・2訳)
巻101	第34	功德宝華般若菩薩会	兼後1巻	新訳	単本 1訳	(菩提流志)
	第35	善徳天子会	兼前1巻	新訳	重本 3訳	(菩提流志)
巻102～105	第36	善住意天子会	4巻	旧訳	重本勘編入	善住意天子経(達摩笈多・7訳)
巻106～108	第37	阿闍世王子会	兼後3巻	新訳	重本 3訳	(菩提流志)
	第38	大乘方便会	兼前3巻	旧訳	重本勘編入	大乘方便経(竺難提・3訳)
巻109～110	第39	賢護長者会	2巻	旧訳	重本勘編入	移識経(闍那崛多・1訳)
巻111	第40	淨侶童女会	兼後3巻 1巻	新訳	単本 1訳	(菩提流志)
	第41	弥勒菩薩八法会		旧訳	重本勘編入	弥勒菩薩所問経(元魏三藏菩提流支・3訳)
	第42	弥勒菩薩所問会	兼前3巻 1巻	新訳	重本 3訳	(菩提流志)
巻112	第43	普明菩薩会	1巻	旧訳	重本勘編入	大宝積経(失訳・3訳)
巻113～114	第44	宝梁聚会	2巻	旧訳	単本勘編入	宝梁聚経(釈道襲)
巻115～116	第45	无尽慧菩薩会	兼後2巻	新訳	単本 1訳	(菩提流志)
	第46	文殊説般若会	兼前2巻	旧訳	重本勘編入	文殊説般若経(曼陀羅仙・1訳)
巻117～118	第47	宝髻菩薩会	2巻	旧訳	重本勘編入	宝髻菩薩経(菩薩淨行経、竺法護・2訳)
巻119	第48	勝鬘夫人会	1巻	新訳	重本 3訳	(菩提流志)
巻120	第49	広博仙会	1巻	新訳	重本 2訳	(菩提流志)

(注)『開元釈経録』巻11により作成。

『宝積経』の別生経と同じことになる。また、Aにみえる『優婆塞問仏経』は、『開元釈経録』巻二十の小乗律に所載されるもので、求那跋摩訳の全一卷からなるが、『開元釈経録』巻十七には『優婆塞問経尼与経旧同決本定毘在第二十四会』とみえており、『大宝積経』優婆離会と同本異訳の『決定毘尼経』の同本、つまり優婆離会の同本異訳ということになる。なおAにみえる文殊関係仏典(五部)とGにみえる『海竜王説法印経』については、直接『大宝積経』との関係を示す史料はみいだせないが、海竜王については第十六会菩薩見実会に言及があり、文殊関係についても第十会文殊師利普門会、第十五会文殊師利授記会、及び文殊説般若会との関係が推定されるなど、『大宝積経』と何らかの関係があるといつて過言ではない。

そこで表10と表11をみると、表10の同本異訳本三十八部中、二十部までが史料上にあらわれ、表11についても別生経二十二部中十九部までがみえ、『根本説一切有部毘奈耶雜事』

表 10 『大宝積経』同本異訳本との関係

相当 会数	大 宝 積 経 (同本異訳)	(A) (宮) 4月16日	(B) (宮) 2月9日 以 後	(D) (國) 3月23日	(I) (國) 3月29日
異1	大方広三戒経	○			
異5	無量寿清浄平等覚経		○	○	
	大阿弥陀経				
	無量寿経				
異6	阿閼仏国経				○
異8	法界体性経				
異9	大乘十法経		○	○	
異10	普門品経			×	
異13	胞胎経			×	
異15	文殊師利土嚴浄経	○		×	
異17	菩薩藏経				
異19	法鏡経				
	郁迦羅越問菩薩行経		○	○	
異24	決定毘尼経	○			
異25	発覚浄心経		○	○	
異29	優曇王経			×	
異30	須摩提経		○	○	
	妙慧童女経				
異32	阿閼世王女阿術達菩薩経			○	
異33	離垢施女経				
	得無垢女経				
異35	文殊師利所説不思議仏境界経			○	
異36	如幻三昧経			○	
	聖善住意経			○	
異37	太子刷護経			○	
	太子和休経				
異38	慧上菩薩問大善権経			○	
異39	大乘顯識経				
異41	大乘方等要慧経			○	
異42	弥勒菩薩所問本願経				
異43	摩訶衍実厳経				
	遣日摩尼宝経				
異46	大般若受殊室利分経				
	文殊般若経				
異47	大集経宝髻品				
	菩薩浄行経				
異48	勝鬘師子吼一乘大方便経				
異49	毘耶娑問経	○			

注) 『問光聖経録』巻11により作成。相当会数欄の「異1」は『大宝積経』第1会の異訳本を意味する。
また、×はDには所見するがCには見えない経典を示す。なお、宮は宮一切経(五月一日経)、関は関
青蔵経の略である。

を入れると二十部となる。一方、同本異訳本では、第二十因会
では『決定毘尼経』だけでなく、『優婆離問仏経』が参照され
ており、徹底した関係仏典の搜索が感じられる。また別生経で

関係史料にみえない仏典は、『文殊師利授記経』『無垢施菩薩分
別応弁経』『大乗方便経』の三部のみであるが、このうち正倉
院文書の中には『文殊師利授記経』はあらわれず、『無垢施菩

薩分別心弁経」も天平神護三年類収の「一切経本目錄」(続後27 十七ノ五九)以後しかみえない。⁽¹²⁾これらの事実から、当時、この二仏典が日本になかった可能性が想定でき、特に『文殊師利授記経』については、先に直接『大宝積経』に關係がないと思われる五部の文殊仏典がみえることで、既存の關係仏典で校勘に備えようとしていたと考えられる。

表10・表11の検討から、『大宝積経』の勘経では、『大宝積経』そのものだけでなく、別生経や同本異訳本などの關係の諸仏典を総括的に搜索し、勘経に臨んでいたといえよう。

ところで『大宝積経』の勘経に別生経を使用した理由としては、七寺藏『迦葉経』について興味深い事実がある。⁽¹³⁾『迦葉経』は、月婆首那(高空)が興和三年(五四一)に訳出した仏典で、『開元釈教録』卷六に「興和三年於驃騎大將軍左僕射内侍中司徒公孫騰第訳見経前序」と、翻訳の事情が序に述べられているとされる。しかしながら、『大宝積経』編入に際してこの経序は削除されたらしく、現行本には経序がみられない。ところが七寺藏『迦葉経』にはその経序がみられるのである。⁽¹⁴⁾つまり別生経のみに『開元釈教録』のいう翻訳事情の記載が残ったといえる。したがって、『大宝積経』の勘経において別生経が利用されたのは、菩提流志によって編入される際に生じた削除、あるいは誤謬などを確認しようとするものであると思われる。

ついで同本異訳経が勘経の対象とされた理由については、梵本が漢訳される際、漢訳者の仏教に対する見識が主観的にあらわれてくると思われるので、漢訳の相違を検討することで、梵本の忠実な内容を把握しようとする考えが念頭にあったと考えられる。

これまでは『大宝積経』全一二〇巻を校勘するために、同本異訳本や別生経が参照されたという立場で考えてきたが、表10・表11でも知られるように、同本異訳本や別生経においても五月一日経と圖書寮経がみえ、両者の校勘が想定されるので、『大宝積経』のみを校勘するというよりも、宝積部を校勘するといった方がよいようにも感じられる。しかし、宝積部で総括的になったものは『大宝積経』であり、勘経機関の名称として「勘大宝積経所」とするものがあること、別生経は基本的に『大宝積経』に編入された同内容であることなどから、やはりこれまで考えてきたように、『大宝積経』全一二〇巻の校勘というのが問題になつていたとすべきであろう。したがって、『大宝積経』の勘経に別生経や同本異訳本が利用された事実、ますます徹底した勘経の態度がうかがえるのである。しかも校勘に際して、善本と思われる唐からの舶載経である圖書寮経のみで行うのではなく、つねに底本として五月一日経を使用していることから、五月一日経を底本に使うことに何らかの意味が

泉生経との関係

[illegible]

・⑧は、5巻本・8巻本をそれぞれ指す。また※は『根本説一切有部毘奈耶雜事』巻11・12として見えるものを示す。なお、

あるとも考えられる。

上述の考察が大過なければ、『大宝積經』の勘經には、同本異訳本や別生經を網羅的に参照しようとする姿勢がうかがわれ、単に『大宝積經』の書写を目的としただけの底本校訂という意味だけでなく、仏典内容にも立ち入った勘經、いうなれば仏典研究にも値する事業であつたと意義付けられることができるであらう。⁽¹⁵⁾つまり、五月一日經の勘經にみるテキスト校訂という段階から一歩進んだ内容になつていゝといえよう。

二、勸経事業の変化とその意義

勅定一切經とされた五月一日經や景雲一切經の構成の特異性を確認し、その特異性を克服するた
めに勸經が行われたこと、そして、その勸經が單
なるテキストの校訂を目的としたものから、仏典
研究に値する内容に変化していったことをみてき
た。これは、勅定一切經の構成の特異性が、やは
り問題があるものとして認識されてきたことを意
味しているものと思われる。その一切經に対する

表 11 『大宝積経』

相当 会数	大宝積経（別生）	(A) (宮)				
		3月22日	4月3日	4月5日	4月26日	5月21日
別3	密迹金剛力士經					
別4	菩 薩 夢 經	○				
別8	法界体性無分別經	○				
別9	十 法 經	○				
別12	大 菩 薩 藏 經	○				
別14	仏為難陀説出家入胎經			*		
別15	文殊師利授記經					
別16	菩薩見実三昧經			○		
別17	菩 薩 藏 經	○				
別18	護 國 菩 薩 經					
別19	郁迦長者所問經					○
別23	迦 葉 經					○
別26	善臂菩薩所問經					○
別32	無 畏 德 女 經					○
別33	無垢施菩薩分別応弁經					○
別36	大方等善住意天子問經					○
別38	大 乘 方 便 經					
別39	移 識 經		○			
別41	弥勒菩薩所問經					
別43	大 宝 積 經					○
別44	宝 梁 經				○	
別47	宝髻菩薩所問經					

注) 『開元宗經錄』巻20末の「不入藏目錄」により作成。相当会数欄の「別3」は『大宝積経』第3会の別生経を意味する。④宮は宮一切経(五月一日経)、國は國書寮経の略である。

認識がより明確になってきたことを示す史料として宝龜十一年(七八〇)十二月二十五日付『西大寺資財流記帳』(『寧楽遺文』中巻)に注目してみたい。やや煩雑ではあるが、西大寺が所蔵していた一切経に関する記載を掲げてみよう。

経律論疏第四

惣一切経律論疏肆部 毫萬漆仟二佰二十三卷
一部 旨御齋会時 在弥勒堂
又雜經律參仟壹佰帙

惣大小乘経律論八百七十四部 貝四千六百十三
卷四百卅四帙

大乘経四百七十四部 二千一百廿七卷 二
百一帙

注大乘経拾參部 二百一卷 廿一帙

大乘律廿五部 五十六卷 五帙

大乘論九十三部 五百廿四卷 五十二帙

小乘経一百八十三部 五百卅七卷 卅七帙

小乘律五十三部 四百四五卷 卅五帙

小乘論卅三部 七百十三卷 七十二帙

右並黄紙及標紫淡綺帶、胡粉地金絵花

軸、竹雲間帙、緋裏錦縁拾組帶

目錄二卷 黄紙、綺軸、胡粉、花輪

(中略)

一部 官納 在藥師堂

惣大小乘經律論七百廿三部二千九百冊二卷二百十八帙

大乘經四百七十八部二千一百廿二卷二百帙

大乘律十四部十四卷一帙

大乘論十六部卅六卷三帙

小乘經一百八十五部五百四十七卷卅七帙

小乘論一部十卷一帙

目錄外注經十三部一百四十六卷十七帙

右並黃紙、綺緒、雜色花軸、雜色帙二百七十八枚

卅九枚竹葉圖、表裏、裏錦邊、拾遺諸

目錄二卷黃紙、綺緒、雜色花軸

(中略)

一部吉備命婦由利 在四王堂 進納

惣大小乘經律論疏章集依出經錄外經等一千廿三部五千二

百八十二卷五百十六帙

大乘經四百七十五部二千二百八卷二百十

大乘律廿五部五十七卷五帙

大乘疏五十八部二百八十九卷三十

大乘章三部廿四卷二帙

小乘經一百七十四部五百卅九卷卅八帙

小乘律五十二部四百廿九卷卅四帙

小乘論廿三部百五十一卷三帙

小乘疏七部七十七卷十帙

小乘章三部廿八卷三帙

集五十一部三百十三卷卅二帙

伝四部八十二卷八帙

出經廿九部九十七卷八帙

錄外經廿八部卅八卷三帙

右並黃紙、綺緒、雜軸、編竹繹帙、

目錄二卷黃紙、綺緒、花軸

(中略)

一部在十一面堂東樓

惣大小乘經律論偽疑錄外注疏等肆仟參佰捌拾參

卷帙肆佰貳拾伍枚

大乘經二千七十卷

大乘律五十七卷

大乘論四百六十五卷

已上帙二百四十五枚

小乘經四百七十六卷

小乘律二百九十八卷

小乘論四百二卷

偽疑經廿卷

已上帙一百十二枚

目錄外經二百七十七卷帙廿四卷

目錄外注經一百九十二卷帙十九枚

疏一百十九卷帙十九枚

右并黃紙、綺緒、白并漆等軸、竹雜色繡帙

(下略)

この史料は西大寺の資財を列記した部分にあたり、当時、西大寺に所蔵されていた四部の一切經について記載したものである。四部すべてが、奈良時代の一切經の特質である入藏録以外の仏典を含んでいることがわかる。各一切經の記載は、安置場所、總卷数、總經帙数、仏典の内訳となっている。またそれぞれに目錄二卷が附属しているが、これは『開元釈教錄』の入藏録二卷を基準に作成したものと思われる。ここで注意されるのは仏典の内訳である。その内容は、次のように、大乘仏典・小乘仏典などの分類をしたらうで、いわゆる入藏録以外を別立てしていることである。

① 弥勒堂安置一切經……注大乘經

② 藥師堂安置一切經……目錄外注經

③ 四王堂安置一切經……大乘疏・大乘章・小乘疏・小乘章・集・伝・出經・錄外經

④ 十一面堂安置一切經……偽疑經・目錄外經・目錄外注經・

疏

③ 四王堂安置一切經で、「集」「伝」「出經」を除けば、他はいづれも明らかに入藏録以外と仏典は別立しているのである。このことは、宝龜年間になると、勅定一切經とされた五月一日經や景雲一切經の構成の特異性に問題があることが明白に認識され、このような内訳にされたものと思われるのである。

『西大寺資財流記帳』にみえる一切經の「目錄」が現存していれば、その内容理解がより深まるのであるが、現存するものは今のところ確認されていない。それどころか、奈良時代に基準とされた『開元釈教錄』入藏録の奈良朝写經も確認されないのは残念である。⁽⁷⁷⁾ところが、奈良時代の一切經目錄につながると思われる平安後期の『開元釈教錄』卷十九の古写經が存在しており、さらに『西大寺資財流記帳』にみえる弥勒堂安置一切經との関連で注目されるものがある。この『開元釈教錄』卷十九は入藏録上にあたるが、平安時代後期に書写された法隆寺一切經⁽⁷⁸⁾のうちの一卷で、奥書によれば、五師林勝が大治二年(一一二七)六月に法隆寺一切經の一具として書写したことがわかる。⁽⁷⁹⁾ここで注目されが、現行本にはない序文と末尾の加筆部分である。弥勒堂安置一切經との関係で重要なのは、現行本の本文最終行と尾題の間に挿入された、以下の部分である。

光讀般若波羅蜜經十卷

注金剛般若波羅蜜一卷 慧淨注

注金剛般若波羅蜜經一卷 肇法師注

注勝鬘獅子孔經二卷

注涅槃經七十二卷

注涅槃經卅卷

注法華經七卷

注維摩詰經八卷

注維摩詰經六卷

法華玄論五十卷

花嚴論五十卷

世親仏性論四卷

撰大乘論釈十二卷

右件九經四論合二百一卷広録不載

唯因見寫名今編附耳

この加筆部分は林勝が書写の際に書き加えられたものでないことは、尾題前に位置していることから容易に想像できる。つまり林勝が書写するにあつての底本にすでに記載されていたといえる。加筆部分は、仏典名を列記する箇所とそれに対する注記の二つの部分からなっている。まず列記部の仏典名を念頭に置いて、注意深く本文をみていくとそれらの仏典が本文中にも挿入されていることに気づく。

さて注記部分には

右件九經四論合二百一卷広録不載

唯因見寫名今編附耳

とみえ、注記部には列記部の仏典を「九經四論合二百一卷」と記している。部数としては十三部と一致しているが、その合計巻数を列記部の仏典の巻数でみると、総計は二五三巻となり、二〇一卷とする記載とは齟齬をきたしている。ただし、『涅槃經』のように、加筆部分と本文挿入部分で巻数の相違が存在していることから、両者が一致しないこともそう重大に考えなくてもよいかもしれない。⁸¹⁾

さて、注記部によれば、追加部の仏典は「広録」には載せていないという。「広録」とは一般的な流布本としての『開元釈教録』という意味と思われ、加筆者がこれらの仏典が一般的な『開元釈教録』にはないことを知っていたといえる。このことは本文への仏典の挿入箇所からも知られ、

妙法蓮華經論一卷（注略）

上五論十一卷 同映

法華玄論十卷

華嚴論五十卷 并録外

（中略）

仏性論四卷（注略）

世親仏性論 録外

などとみえ、「法華玄論十卷」「華嚴論五十卷」および「世親仏性論四卷」がそれぞれ「録外」と注記され、本来、入蔵してない仏典であることが認識されている。

さらに「唯因見寫名今編附耳」と記しており、『開元釈教録』の入蔵録にはないはずのものであるが、書写に際して実際に仏典名が列記されていたので、取り敢えずそのまま写しただけであるという。このことからすると、加筆者が書写に際しての底本の本文に、すでに上記の仏典が挿入されていたと考えられる。

つまり林勝が書写した底本の、さらにその底本に『開元釈教録』入蔵録に未掲載の仏典が挿入されていたといえよう。これによって、入蔵録以外を包括する奈良時代の一切経の状況と考えあわせると、林勝書写の祖本は、単なる『開元釈教録』巻十九の写本ではなく、『開元釈教録』に基づいて書写された一切経の目録、さらにいえば奈良時代のある一切経の目録につながるものであったと想定できるのである。

弥勒堂安置一切経では、入蔵録外の中は、『注大乘經拾參部二百一卷廿一帙』とみえる部分で、十三部二〇一卷とは、ここに取り上げた法隆寺一切経の『開元釈教録』巻十九に追加された部数と一致しているのである。この『開元釈教録』巻十九が西大寺（弥勒堂）一切経の目録につながるものと考えらるならば、

ここに註記された「唯因見寫名今編附耳」という文言は、すでにこのようなあり方の一切経に対して疑義を挟むほどに一切経理解がすすんでいたとすることもできよう。いづれにしても、『西大寺流記資財帳』や『開元釈教録』の記載は、先にみた勘経の深化と連続するものと考えられよう。

山下有美氏が「一切経目録卷下」（続々修14ノ6・6裏 二二 十五ノ三〇）の分析を通して、当時、仏典理解が不十分であったことを指摘されたが、この史料を天平勝宝三年頃と考える⁽⁸²⁾とすると、その三年後には五月一日経の勘経がはじまり、以降、天平勝宝七歳の勘経の仏典研究に値するレベルまで急速に進んでいったことになる。このような急速な仏典理解の深化の背景には、やはり唐僧鑑真の来日が大きく影響していたのではないだろうか。彼の来日以前は、仏典に錯誤が多く、その一々を彼が正したとされる物化⁽⁸³⁾は、誇張があるとは思われるが、日本の仏教界へ与えたインパクトは多大なものがあつたであろうし、一切経の内容についても当然、影響を及ぼしたであろう。これが直接的な勘経の深化へとつながったのではないだろうか。

おわりに

日本では自国語に仏典を翻訳する翻経ということがなされず、

漢訳仏典をそのまま受容している。当然、翻経を通して仏典の研究は深化し、その研究成果として一切経が成立するのであり、教学の深化とあいまって、宗派の形成もあつたといえよう。この点日本では、すべての点である程度できあがつた中国・朝鮮半島の状況を受容するという点、その理解の具合が問題になつて来るであらう。

山下有美氏は、勅定一切経の分析を通して、一切経のシステムが本格的に導入されるのは『開元釈教録』に基づく一切経が意図されて以降であるとされている。天平勝宝期の五月一日経の勘経にふれたが、先に述べた一切経の權威を保證するとともに、以後、一切経書写に際して必ずといってよいほど勘経をまづ行いテキストの校訂を実施して書写するようになるように、ようやく仏典そのものの研究も深まったものと思われる。その実例としては天平勝宝七歳の『大宝積経』の勘経には別生や同本義訳なども参照され、仏典研究の深化をうかがわせるのである。したがって、奈良時代前期において仏典研究がどの程度であつたのが問題となるであらう。

奈良時代の一切経は、現存一切の仏典の集成を目指すものであり、別生経・疑偽経などについては判別不能であることから、漢訳仏典の受容側の限界をしめしつつ、中国仏教に敏感に反応し中国最新入蔵録を基準とした。しかし、現状ではコレクショ

ンの完備は不可能であつたため、現存仏典の全集成に目標を定め、その日本独自で、ある意味不完全な日本の一切経の權威を保證するため、将来経（唐経）や唐僧によって勘経を精力的に進めたものと思われる。その意義として、対内的には仏教教義の根拠たる仏典を國家が総括することで、仏教を宗教的支配イデオロギーとして機能させる点にあり、対外的には中国・新羅など東アジア世界に対して完成した律令國家としての威信を誇示する道具でもあつたといえよう。しかしながら、鑑真の來日を契機として、勘経を通して、日本の一切経のありようの問題性が明白に認識されるようになり、仏典理解や研究状況が深化していったことがわかるといえる。

平安時代になると、承和年間（八三四―四八）や仁寿年間（八五一―四）にかけて関東諸國にたびたび一切経書写が命じられたことが知られるが、遺品としては緑野寺（淨院寺）一切経で、承和元年の一切経書写に際して底本になつた『金剛頂瑜伽經』が伝存するのみで、一切経の書写例が激減することになる。この一切経書写例の減少の背景には、官營寫經所の衰退や書寫事業の経済的な問題や、個別の仏典が追善などの目的や信仰内容に応じて写されることが多くなつたためと考えられる。また平安期にはそれまで一切経の基準とされてきた『開元釈教録』にかわつて、大同元年（八〇六）に空海が將來した『門照撰

『貞元新定釈教目録』に次第にとつてかわられていくことになる。そして、ふたたび一切経書写が盛行するのは平安後期になつてからである。このような平安時代の一切経の状況は、奈良時代の一切経の状況とどのような関係にあるかという点が問題となるが、この点は今後の課題とし、ひとまず筆をおくことにしたい。

註

- (1) 『日本書紀』『上宮聖德法王帝説』
- (2) 『日本書紀』白雉二年十二月晦条。
- (3) 『日本書紀』天武二年三月是月条。
- (4) 『金剛場陀羅尼經』(個人藏)。
歲次丙戌年五月川内國志貴許内知識為七世父母及一切衆生敬造金剛場陀羅尼經一部藉此善因往生淨土終成正覺
教化僧宝林
- (5) 聖武發願一切経『觀世音菩薩受記經』(根津美術館藏)。
朕以万機之暇披覽典籍全身延命安民存業者経史之中釈教最上由是仰憑三宝燭依一乘敬写一切経卷輔已訖諱之者以至誠心上為國家下及生類乞索百年祈禱万福聞之者無量劫間不墮惡趣遠離此網俱登彼岸
天平六年歲在甲戌始写
写経司治部卿從四位上門部王
なお榮原永遠男「天平六年の聖武天皇發願一切経」(『続日本

奈良時代の一切経について

紀の時代、塙書房、一九九四年、のち同氏『奈良時代の写経と内裏』所収、塙書房、二〇〇〇年)参照。

- (6) 『大方等如来藏經』には「時に世尊、金剛慧菩薩摩訶薩に告ぐ、若しは出若しは在家の善男子善女人が受持し讀誦し書写し供養し、広く人の為に如来藏經を説けば、獲る所の功德は計量すべからず、法華經卷四には「若し復人ありて仏典を受持し讀誦し解説するとともに、これを書写すれば、よく大願を成就す」などある。

- (7) 薩田香融『南都仏教における救済の論理―問写経の研究―』(日本宗教史研究会編『日本宗教史研究』四「救済とその論理」所収、法蔵館、一九七四年)。なお薩田氏の見解はとくに断らないかぎり本論文による。

- (8) 近年の正倉院文書研究を総括的に述べたものに大平聡「正倉院文書研究試論」(『日本史研究』三二八、一九八九年)、榮原永遠男「正倉院文書研究の課題」(石上英一他編『新版 古代の日本』『古代資料研究の方法』、角川書店、一九九三年、のち同氏『奈良時代の写経と内裏』所収、註(5)参照)などがある。

- (9) 榮原永遠男『奈良時代の写経と内裏』(註(5)参照)、同氏『奈良時代写経史研究』(塙書房、二〇〇三年)、山下有美「正倉院文書と写経所の研究」(吉川弘文館、一九九九年)。

- (10) 上川通夫「律令国家形成期の仏教」(『仏教史学研究』三七二、一九九四年)、同氏「一切経と古代の仏教」(『愛知県立大学文学部論集』四七、一九九九年)、同氏「一切経と中世の仏教」(『年報中世史研究』二四、一九九九年)。

- (11) 『続日本紀』文武四年二月己未条。

- (12) 『続日本紀』天平十六年十月辛卯条。

- (13) 『続日本紀』天平十八年六月己亥条。
- (14) 『続日本紀』天平宝字七年五月戊申条。
- (15) 光明子発願一切経『阿闍世王経』卷下（奈良国立博物館蔵）。
皇后藤原氏光明子奉為
尊考贈正一位太政大臣府君尊妣贈
從一位橘氏太夫人敬写一切経論及
律莊嚴既了伏願憑斯勝因奉資冥
助永庇菩提之樹長遊般若之津又願
上奉聖朝恒延福壽下及寮采共尽
忠節又光明子自發誓言弘濟沈淪勸
除煩惱妙窮諸法早契菩提乃至伝
燈無窮流布天下聞名持卷獲福消
灾一切迷方会帰覺路
天平十二年五月一日記
- (16) 「一切経本充并納紙帳」（正倉院文書・続々修二帙二卷、『大
日本古文書』（編年文書）八卷一七一頁以下、以下「続々修二
ノ二八ノ一七一」などと略す）
(17) 「後写一切経難案」（続々修二ノ四九ノ一）。なお大平聡
『正倉院文書と古写経の研究による奈良時代政治史の検討』
『科研報告書』（一九九五年）参照。
- (18) 山本幸男「天平宝字四―五年における一切経の書写―関係史
料の整理と金体像の検討―」（『南部仏教』五九・六〇、一九八
八年）、同氏「光明皇太后崩後の藤原仲麻呂政権―周忌斎一切
書写事業の検討を通じて―」（直木孝次郎先生古稀記念会編
『古代史論集』中所収、塙書房、一九八八年、のち同氏『写経
所文書の基礎的研究』所収、吉川弘文館、二〇〇二年）。
- (19) 孝謙天皇発願一切経『十誦律』卷一七（五島美術館蔵）。
- 維神護景雲二年歳在戊申五月
十三日景申弟子謹奉為
先聖敬写一切経一部工夫之莊
嚴畢矣
法師之軫誠尽焉伏願橋
山之鳳輅向蓮場而鳴鑾汾水之龍
驂泛茲香海而留影遂被不測之了義
永証弥高之法身遠暨存亡傍周
動植同茲景福共沐禪流或變桑
田敢作頌曰
非有能仁誰明正
法惟朕仰止給修
懸衆權門利広兮拔苦知力用兮
登摩敢對不居之歲月式垂罔極之
頌翰
- (20) 榮原永遠男「奉写一切経所の写経事業」（『追手門学院大学文
学部紀要』一一、一九七六年、のち同氏『奈良時代写経史研
究』所収、註（9）参照）。
- (21) 榮原永遠男「國書寮一切経の変遷」（『人文研究』四八―一二、
一九九六年、のち同氏『奈良時代の写経と内裏』所収、註
（5）参照）、同氏「國書寮経の構成と展開」（『日本国家の史的
研究』、思文閣出版、一九九七年、のち同氏『奈良時代の写経
と内裏』所収、註（5）参照）参照。
- (22) 藤原夫人発願経『実相般若波羅蜜経』（五島美術館蔵）。
維天平十二年歳次庚辰三月十五日正三位藤原夫
人奉為 亡考贈左大臣府君及見在 内親
郡主発願敬写一切経律論各一部莊嚴已訖

設斎敬讀藉此勝縁伏惟 尊府君道

濟迷途神遊淨国見在 郡主心明朗慧福

祚無窮伏願

聖朝万寿国土清平百辟尽忠兆民安樂及

檀主藤原夫人常遇善縁必成勝果俱出慶

勞同登彼岸

(23) 善光寺印經『中阿含經』卷九(奈良國立博物館藏)。

天平宝字元年潤八月十日式部位下少初位下上毛野君大河勘

本經

覆位興福寺沙門行禪証

天平宝字三年九月廿七日散位少初位下一難宝郎写

坤宮舍人少初位下上秦忌寸忍国初校

左大舍人少初位上大隅忌寸君足再校

散位從八位下大綱君広道參校

装書匠散位少初位上秦忌寸東人装

用穀紙卅一張

なお大平聡「善光寺印經の基礎的考察」(『神奈川地域史研

究』六、一九八七年、以下「大平A論文」とする)、同氏「善

光寺印經與書集成」(『藤沢市史研究』二二、一九八九年、以下

「大平B論文」とする)、同氏「正倉院文書に見える『奉請』

(『ヒスとリア』一二六、一九九〇年、以下「大平C論文」とす

る)、同氏「善光寺印經與書集成・補遺」(『藤沢市史研究』

二四、一九九一年、以下「大平D論文」とする)参照。

(24) 吉備由利願經『大毘盧遮那成佛神變加持經』卷一(西大寺

藏)。

天平神護二年十月八日正四位下吉備朝臣由利奉為

天朝奉寫一切律論疏傳等一部

奈良時代の一切経について

(25) 福山敏男「奈良朝に於ける写経所に関する研究」(『史学雜

誌』四三ノ一二、一九三三年、のち『福山敏男著作集』二(寺

院建築の研究・中)、中央美術公論社、一九八二年、所収)、堀

池春峰「光明皇后御願瑠伽師地論の書写について」(『南都仏

教』創刊号、一九三四年、のち同『南都仏教史の研究』上(東

大寺篇)、法蔵館、一九八〇年、所収)、同「光明皇后御願一切

経と正倉院聖語藏」(『古代学』三ノ三、一九三四年、のち同上

書所収)、皆川完一「光明皇后願經五月一日経の書写について」

(『坂本太郎博士還暦記念会編』『日本古代史論集』上、吉川弘文

館、一九六二年、のち『日本古文書学論集』三(『古代』)、吉

川弘文館、一九八八年、所収)、赤尾栄慶「光明皇后御願一切

経」五月一日経について」(『古筆学叢林』一一(『古筆と写経』、

八木書店、一九八九年)、宮崎健司「光明皇后発願五月一日経

の勘経について」(『尋源』四一・四二合併号、一九九二年)、

大平聡「天平勝宝六年の遣唐使と五月一日経」(『日本律令制論

集』上、吉川弘文館、一九九三年)、同氏「五月一日経の勘経

と内裏・法華寺」(『宮城学院女子大学キリスト教文化研究所研

究年報』二六、一九九三年)、山下有美「正倉院文書と写経所

の研究」(註(9)参照)。

(26) 榮原永遠男「内裏における勘経事業」(『門脇植二編』『日本古

代國家の展開』下、思文閣出版、一九九五年、のち同氏「奈良

時代の写経と内裏」所収、註(5)参照)、同氏「写佛書所と

奉寫執經所」(『続日本紀研究』三〇〇、一九九六年、のち同氏

「奈良時代の写経と内裏」所収、註(5)参照)参照。

(27) 山下有美「日本古代國家における一切経と対外意識」(『歴史

評論』五八六、一九九九年)、同氏「五月一日経・創出」の史

的意義」(『正倉院文書研究』七、一九九九年)。

- (28) 本史料には年紀がなく、『大日本古文書』編者は天平勝宝三年四月二十四日類取としている。
- (29) 註(27)に同じ。
- (30) 宮崎健司「東大寺の『華嚴経』講説」(『佛教大学総合研究所紀要』別冊〈宗教と政治〉、一九九八年)、同「奈良時代の『華嚴経』講説―関連仏典の受容をめぐって―」(『岡田香織編』『日本仏教の史的展開』所収、瑞書房、一九九九年)。
- (31) 東野治之「正倉院文書からみた新羅文物」(『遣唐使と正倉院』所収、岩波書店、一九九二年)。
- (32) 宮崎健司「大谷大学図書館蔵『判比量論』と大安寺審祥」(『史聚会編』『奈良平安時代史の諸相』所収、高科書店、一九九七年)。
- (33) 『延暦僧録』普照伝(『日本高僧伝要文抄』卷三二)
…自至聖朝舍国不伏、無戒不知伝戒来由…
『東大寺要録』卷四、戒壇院条
僧録云、勝宝六年四月初、於盧舎那殿前立戒壇、…少遠坐
拳不伏、人々面色之中、有興福寺僧法寂、起立大叫龍言…
(34) 『裝潢本経充帳』(続々修28ノ3 八ノ一一一一)。
(35) 田中塊堂『日本古写経現存目録』(思文閣、一九七三年)、是
澤恭三『写経』(根津美術館蔵品シリーズ11、根津美術館、一
九八四年)、寧楽道文『中巻・下巻及び杉本一樹「聖語藏経
卷紀年銘集成(一)」』(『正倉院年報』七、一九八五年)によつ
て検索し、できるだけそれぞれの所蔵目録等で確認するよう努
めた。
- (36) 聖語藏の『大集月藏分』卷三・卷四は、他の巻の追蹤とはほ
同様な記載ながら「僧敬明以下の「証」にあたる僧名の列記を
持たない。
- (37) 大平A・B・C論文。また、校正の例であるが、上坂倉次
「島田蕃根と縮刷藏経」(『ビタカ』四ノ七、一九三六年)によ
れば、明治期につくられた縮刷藏経の校訂作業は、「まづ一人
が高聲で高麗藏を讀むと、三人が各々その側で元、宋、明藏を
見て居て、双方で相違した点を謂ひ立て、校訂を施すやり方
でなされている。
- (38) 敬明と玄藏は天平勝宝五年四月七日付「大安寺三綱牒」(続
別9 三ノ六二四一)に大安寺仁王会の講師としてみえ、特に
玄藏は天平勝宝六年八月九日付「大安寺三綱牒」(続別10 四
ノ二七一)に寺主としてみえる。行簡と環忍は宝龜七年二月二
十九日付「大安寺三綱可信牒」(隨心院文書 六ノ五八七一)
に「大寺主大法師行簡」「上座法師環忍」とみえる。なお、表
1によれば『大方広十輪経』卷一・六に「大安寺沙門善証」の
存在が知られるが、この「善証」は上述の天平勝宝五年の「大
安寺三綱牒」にみえる「大都維那僧善治」と同一人物かもしれ
ない。
- (39) 勝寂の名は正倉院文書にもしばしばみえる。了行は天平宝字
二年八月九日付「元興寺三綱牒」(続々修39ノ3裏 十三ノ四
八三)に寺主としてみえ、法隆は天平勝宝三年六月二十六日
付「応請疏本目録」(続々修12ノ9 十二ノ九)に「元興寺
法隆」としてみえる。なお尊応は元興寺僧であつたことを明確
に知れないが、『日本後紀』弘仁二年六月戊辰条の勝悟の卒
伝には「法師初為尊応大德弟子、是則芳野神寂大德之入室也」
とみえ、神寂が元興寺僧であつたことからその弟子の尊応も
やはり元興寺僧であつたと思われる。
- (40) 佐久間竜「慈訓」(『日本古代僧伝の研究』吉川弘文館、一九
八三年)。

- (41) 例えば、日置造袁麻呂は天平勝宝八歳八月十八日付「外島院返抄」(続修42 四ノ七四)に、内藏金成も仏典の送り状(麁芥35 四ノ三三)にそれぞれ署名している。
- (42) 松本前掲論文、註(25)参照。
- (43) 「奉請」の用法については大平C論文を参照。「奉請」には「借用」と「貸出」の相反する意味を持つため、どちらに解釈するかは史料によって異なってくる。
- (44) 皆川前掲論文、註(25)参照。
- (45) 内裏宣については吉川真司「奈良時代の宣について」(『史林』七一ノ四、一九八八年、のち同氏「律令官僚制の研究」所収、塙書房、一九九八年)及び早川庄八「宣旨試論」(岩波書店、一九九〇年)を参照。
- (46) 本史料は個人蔵ではあるが、国立歴史民俗博物館編『正倉院文書拾遺』(便利堂、一九九二年)に全文が図版として掲載されている。以下、同書分類番号によって「歴民17」などと示す。
- (47) 『続日本紀』神護景雲二年七月辛丑条。
- (48) 『唯識論第二卷同学抄第四』。
- (49) 本文書にみえる永金は神護景雲四年五月八日付「普光寺牒」(薬師院文書 六ノ一一)に「伝灯進守大法師」として署名欄にみえる。
- (50) 大平C論文の註(14)に「本帳は冒頭を切断し、これに白紙を貼って『表紙』とした後、その端裏に『表題』が書かれた、つまり切断部分に外島院から造東大寺司宛の文書が記されていたのではないか」との杉本一樹氏の見解を紹介され、同意されている。註(23)参照。
- (51) 大平聡氏はA論文では本史料について「諸寺・内裏から借出した經典の管理のために作製された帳簿」と理解されたが、B

論文において先のA論文の理解を史料の誤読による誤りで訂正すべきことを述べられ、C論文では「諸寺に經典を割ふつて勘経させるための記録」と判断されている。従うべき見解であろう。註(23)参照。

- (52) 佐久間前掲論文、註(40)参照。
- (53) 大平C論文、註(23)参照。
- (54) 田中槐堂『古写経経鑑』(鵬故郷舎、一九四二年)・『日本写経経鑑』(三明社、一九五三年)・『日本古写経現存目録』(思文閣、一九七三年)。山本信吉「増壹阿含經 卷第五十」解説(『奈良六大寺大観』六(薬師寺)、岩波書店、一九七〇年、所収)。
- (55) 大平A・B論文、註(23)参照。
- (56) 大平A論文、註(23)参照。
- (57) 善光については堀池春峰「奈良時代における尼寺・尼僧」(『南都仏教』六、一九五九年、のち同氏「南都仏教史の研究」上(東大寺篇)所収、法蔵館、一九八〇年)や須田春子「尼寺とその教学」(同氏「律令女性史研究」所収、千代田書房、一九七八年)などがある。堀池氏はもともと坂田寺尼僧勝との関連で善光を坂田寺の項で扱われているが、法華寺の尼僧であるうことを示唆されている。一方、須田氏は、善光が関わった仏典よりその教学を考察され、「尼僧界の重き存在」であつたとされているが、正倉院文書にみえる嶋院・中島院・外島院について、「これらの建物には平城宮裡に併存」し、「外嶋坊」は少僧都慈訓の住持であるが、『嶋』と『中嶋』は尼僧の住持するところとし、善光を嶋院の尼僧であるとされる。
- (58) 表7は大平A・B両論文(註(23)参照)に掲載される「善光朱印経一覽」をもとにして作製した。

- (59) 大平B論文、註(23) 参照。
- (60) 大平C論文、註(23) 参照。
- (61) この勘経については、専論ではないが、大平聡「五月一日経の勘経と内裏・法華寺」(『宮城学院女子大学キリスト教文化研究所研究年報』二六、一九九三年)に論及されており、以下、大平氏の見解として特に断らない場合は本論文による。なお大平A論文(註(23)参照)にも若干ふれられている。
- (62) 以下、『大宝積経』の勘経に関わる史料の復原および性格については、宮崎健司「天平勝宝七歳における『大宝積経』の勘経」(『正倉院文書研究』二、一九九四年)を参照。
- (63) 本史料は、現状では断簡に分割されているが、藤井24裏・21裏・24裏・21裏・28裏・30裏・35裏・28裏・25裏(二十四ノ五〇九一・一一・十一ノ二五六一七・二十四ノ五一・一六・二十四ノ五一六・十一ノ二六〇一二・四ノ八七七八・三ノ六四二一五四・四ノ三七七八・四ノ八五七八・二五ノ一七八一八)の順で復原することができる。
- (64) 宮崎健司「法華寺の三・鶴院について」(『大谷学報』七一ノ四、一九九二年)。
- (65) 佐久間竜「傍系写経所の一考察―中島院・鶴院・外島院について―」(『続日本紀研究』五ノ四、一九五八年)。
- (66) 善光寺印経の遺巻である天平勝宝九歳六月書写の『大仏頂首楞嚴経』巻一に「従六位上行紫微少疏遠江員外少目池原君禾守」(『寧楽道文』中巻所収)とみえる。
- (67) 大平A・B・D論文(註(23)参照)。
- (68) 『開元釈教録』(『大正新脩大藏経』五五所収)巻九「菩提流志伝」及び『大宝積経』経序(『大正新脩大藏経』一一所収)。
- (69) 望月信亨編・塚本善隆監修『望月仏教大辞典』増訂版全十巻
- (70) (『世界聖典刊行協会、一九五四―六三年』参照。
七七四(宝亀五)年類収の『雜経目録』(続々修12ノ11 二十三ノ一二五)は、まったくの同文とはいえないが、この「不入蔵目録」を書写したものと思われ、しかもここでは『開元釈教録』書写の断簡ではなく、その中に合点もみられることから、経録が帳簿として転用されていたことがわかる。また正倉院文書にしばしばみえる「一切経目録」が二巻であることから、例えば、『開元釈教録』を基準として書写した一切経の場合では、『開元釈教録』の現定入蔵録である巻十九「大乘経律論入蔵目録」と巻二十「小乗経律論賢聖集伝入蔵目録」を書写し、書写した一切経の目録として利用されたことが想定される。
- (71) 別生経とは、支派別行経・支流出生経・支派経とも呼ばれるもので、隋の開皇十四年(五九四)成立の法経に撰『衆経目録』巻二には「並是後人隨意好、於大本内、抄出別行」と見え、また『開元釈教録』巻十六にも「支派経者、謂大部之中抄出別行」とするように大部の仏典から任意に抄出されて独立仏典としたものといえる。『大宝積経』の場合、『開元釈教録』巻二十末に付された「不入蔵目録」記載のものは、むしろオリジナルのもので、それを菩提流志が編入したものであるから、厳密には「別生経」と呼ぶのは正しくないかもしれないが、実際には年次未詳の『雜経目録』(続々修12ノ11 二二三ノ一二六一)では「別生経」と呼んでいるので、この呼称を用いることにする。
- (72) 石田茂作「写経より見たる奈良朝仏教の研究」(『東洋文庫、一九三〇年、のち東洋書林発行・原書房発売、一九八二年新装版』)及び木本好信編『奈良朝典籍所載仏書解説索引』(『国書刊行会、一九八九年』)によって検索した。

- (73) 七寺は、名古屋市中区門前町に所在する寺院で、古くは稲嶺山長福寺と称していた。ここには、重要文化財に指定されている七寺一切経が所蔵されている。それは、承安五年（一一七五）治承四年（一一八〇）にかけて主に稲嶺山長福寺（七寺）で、『貞元釈教録』を指針として、『法勝寺金字一切経』を基本として『伏見本』と近江国の『梵釈寺本』を参照して書写された一切経であり、現存巻数は四九五四巻を遺している。近年の調査で、多くの古逸仏典（真経・偽経など）が含まれていることが明らかとなり、定説では底本は宋版一切経と考えられていたが、古逸仏典が所蔵されていること、古形を表わす『貞元釈教録』巻二十九、義浄撰『南海寄帰法伝』・同『大唐西域求法高僧伝』の本文研究から、その大半が奈良朝写経につながる貴重なものとの指摘がなされている。落合俊典「七寺一切経と古逸経典」（『仏教史学研究』三三ノ二、一九九〇年）、同氏「七寺一切経の構成と書写テキスト」（『華頂短期大学研究紀要』三五、一九九〇年）参照。
- (74) 落合俊典「月婆首那訳迦葉経に冠せられた経序の行方」（『仏教史学研究』三五ノ二、一九九二年）。
- (75) 光明子にとって『大宝積経』のもつ意味については、宮崎健司「天平勝宝七歳における『大宝積経』の勘経」（『正倉院文書研究』二二、一九九四年）参照。
- (76) 「出経」は内容が不明であるが、「集」「伝」については、入藏録にも存在するので、その内容がわからなければ、入藏録内かどうかを判断することはできないであろう。
- (77) 奈良朝写経としては、『開元釈教録』巻十八（文化庁蔵）が知られるぐらいである。
- (78) 法隆寺一切経については、大屋徳城「法隆寺一切経の由来」
- (79) 「性相」二、一九二八年）、同氏「法隆寺一切経」（法隆寺勸学院同窓会編『日本上代文化の研究』、法隆寺勸学院同窓会、一九四一年、のち『大屋徳城著作集』〈仏教古板経の研究〉、国書刊行会、一九八八年、所収）、奈良六大大寺大観刊行会編『奈良六大大寺大観』四（法隆寺（四）彫刻・典籍）（岩波書店、一九七一年）、堀池春峰「平安時代の一切経書写と法隆寺一切経」（『南都仏教』二六、一九七一年、のち同氏「南都仏教史の研究」下（法蔵館、一九八二年）、同朋学園大学附属図書館「山田コレクション」古写古版経典目録「法隆寺一切経を中心に」）（『同朋大学学報』二七、一九七二年）、重要文化財編集委員会編『新指定重要文化財』八（書跡・典籍・古文書Ⅱ）（毎日新聞社、一九八一年）、小島恵昭「蓬戸山房文庫所蔵古写古版経目録」（『東海仏教』二七、一九八二年）、法隆寺昭和資財帳編集委「法隆寺の至宝」写経・版経・版本（昭和資財帳七）（小学館、一九九七年）、同朋大学「東海印度学仏教学会」第一回大蔵会展覧会目録（同朋大学、一九九七年）、笠沙雅章編『法隆寺一切経の基礎的研究—大谷大学所蔵本を中心として—』（『科研報告書』一九九九年）、伊藤ひろ美「法隆寺一切経にみる『貞元新定釈教目録』—同朋大学所蔵本を中心に—」（『同朋大学佛教文化研究所紀要』二二、二〇〇二年）、宮崎健司「法隆寺一切経と『貞元新定釈教目録』」（伊藤唯真編『日本仏教の形成と展開』、法蔵館、二〇〇二年）などがある。
- (80) ここにいう現行本は、『高麗版大蔵経』を底本とする『大正法隆寺一切経内 五師林勝書了』

新脩大藏經』五五所収本をさす。

(81) 卷数の相違は、成卷の仕方によつて、複数卷を一巻とすると
いつたようなことが関係しているかも知れない。

(82) 山下龍揚論文、註(27)参照。

(83) 註(14)に同じ。